
[1] 北海道・東北北部

越田賢一郎

はじめに

いわゆる「日本文化」を考える上で、北海道や東北に展開された北方文化の持つ意味が注目されるようになり、いくつかのシンポジウムが開催され、多くの出版物が刊行されるようになってい⁽¹⁾。藤本強は、沖縄と北海道の文化を「南の文化」と「北の文化」とし、本州を中心とした農耕社会の成立を背景にした「中の文化」と区分している〔藤本1988〕。そして「北の文化」と「中の文化」の間に「ほかしの地域」があり、東北北部から渡島半島地域にあたるとされた。

本稿で対象とするのは、まさに「北の文化」の展開した地域と「ほかし」の地帯である。歴史的には、古代においては蝦夷（エミシ）、中世には蝦夷（エゾ）、さらに近世以降はアイヌ民族と関係する地域である。そこで展開した文化が「中の文化」と比べてどのような特色を持つのかを明らかにしていくことが、相互の文化を理解していく上で重要であると思われる。

本稿では食器の組成を通してこの地域の「食文化」についてふれてみたい。扱う時代は、本州（「中の文化」）の古代末期から近世初頭にあたる。

1 研究の視点

(1) 地域区分と特色

ここで取り扱う東北北部から北海道にかけては、本州各地と比べいくつかの特色がみられる。本論に入る前に地域区分と、各地域の特色について簡単にふれておきたい。

北海道は石狩低地帯を中心とした道央部を境に、南西部と東北部に3分し、東北北部を加えて大きく4地域にわけて論を進めていくことにする。

東北北部は、縄文時代から古代にかけて、東北南部だけでなく北海道南西部と親似た文化を持った地域である。最近では富樫泰時が円筒土器文化の広がりを中心に、この地域の特殊性を述べておられる〔富樫1994〕。これに従って東北南部との境を、太平洋側では馬淵川流域、日本海側では米代川流域においておきたい。古代前半の律令国家期にも、この地域をはさんで南北の違いは顕著である。なおこの地域内では、近世に津軽と南部に別れた如く、東西差もかなりみられる。

北海道南西部は、余市と長万部を結ぶ地域から南西部にあたる、渡島、桧山支庁を中心とした地域とする。地理的に近いこともあって、東北北部との関係が強い地域であり、同じ文化圏に含まれることが多い。しかし、古代の終末期から政治的に本州と区分されるようになり、中世国家の領域外とみなされることとなる。この地域への本州勢力（和人）の進出は早く、土着のアイヌ勢力との摩擦がみられる地域である。物質文化の面ではかなり東北北部と共通したものを有している。

道央部は、余市と長万部を結ぶ地域から、日高、胆振、石狩、空知、留萌支庁管内を含めておく。南西部との結びつきで、本州からの物質文化がかなり流入して来る。ただ、和人勢力は中世第IV期に部分的に進出して来るものの、本格的に定着するのは中世第V期から近世第I期にかけてであり、アイヌ勢力との摩擦を起こしていく。この地域の日本海側は日本海交易圏の北部に位置し、本州だけでなく、樺太を介した大陸との交易品も流入している。また太平洋側も内浦湾から日高にかけて、沿岸交易が広く展開していたと思われる。そして、現在の千歳を経由する日本海と太平洋を結ぶルートは、各時代に重要な内陸交通路として利用されている。

東北部は、南西部や道央部と比べ和人勢力の進出は遅れ、近世第I期になって本格化する。本州との関連だけでなく、樺太や千島を通しての大陸とのつながりを考えていかねばならない地域である。調査遺跡の少なさもあって出土遺物が少なく、まだ実態の明らかでない時期も多い。なお東北部は道央部とともに、アイヌ文化形成の上で大きな役割を持つ地域と考えられる。

(2) 時期区分と研究資料

東北部および北海道南西部は、本州各地と同じ時期区分が適用できる。道央部と道北部については、便宜的に同じ区分を利用するものの、実質的にはほとんど該当するものはない。ただし、北海道内の土着文化については、擦文文化の終焉後をアイヌ文化と呼んでおく。

ところで、「中の文化」を外れると文献資料が極端に少なくなり、出現の時期が遅れる。そのため、考古資料、民俗資料、口承文芸などからの歴史復元が重要な課題となっている。ただ、民俗資料と口承文芸は年代をとらえることが難しい面を持っている。

東北部では、古代末から奥州藤原氏関連の資料、中世では各豪族関連の文献資料がある。考古学的にも各地で館の調査が行われ、多くの資料が出土している。これに対し、北海道では中世に相当する時代の文献資料はほとんどなく、考古資料も非常に資料が少ない。年代の明らかな資料は、南西部から道央部にかけて見られる、本州からの移入品である陶磁器や古銭などに限られている。そのため遺跡の年代決定のためにこれらの遺物を利用し、道内で製作された「もの」の年代観を考える方法がとられている。

(3) 食文化の特質

「中の文化」が展開する地域と比べ、農耕作物は米作が中心とは考えられない地域が多い。東北部では、近世、近代にあっても稲作がほとんど行われなかった地域がある。特に北海道では、明治以降稲作が行われるようになった地域がほとんどで、東北部では気候との関係で稲が育たない地域もある。このような地区では、雑穀栽培が中心となる場合が多いようである。北海道では、擦文時代から近世にかけて、アワ、ヒエ、キビなどの栽培種子が出土しており、雑穀栽培が定着していたと考えられる。コメの検出された遺跡も10箇所近くになり、改めて栽培の有無を検討する必要がある。一方岩礁性の海岸地域では、穀類は移入されただけで生産は行われず、魚撈、貝類・海藻類採集や海獣猟にたよった生活が行われていた可能性がある。

ところで、各地域とも冬期には貯蔵食品が必要となる。穀類や野菜類のほか、縄文時代以来の伝統食品である肉類、魚貝類、木の実・山菜などの植物性食料などがこれにあたる。各地の民俗例から、これらの食品を貯蔵するための独特な方法や、調理方法が開発されていることを知ることができる。このなかでも特に鮭と鱒が重要な位置を占めていたことは、漁に際する儀礼や数多くの料理

法があることからもうかがえる。対象とした時代にあっても、同様な状況であったことが予想できる。考古学的に貯蔵方法を明らかにすることはなかなか難しいが、土壌内部や貯蔵用具の内面付着物の分析などが今後必要となろう。

食文化に伴う儀礼には、年中行事、祭祀、通過儀礼に伴うものなど、家や村内で行われるものがある。更に大きな単位での地域の祭祀、国の行事などとも関係する。前者は主として共同体の維持を目的したものであり、後者は政治的、経済的な関係が強いものと考えられる。後者を歴史的に見ると、対象としている地域では、律令国家との接触が大きな意味を持った可能性がある。

7世紀半ば以降の律令国家の北方進出によって、蝦夷は城柵を介して国家権力とのつながりを持つようになってきた。その一部分に、交易と一体化したような朝貢と饗給の関係がある。饗給によって得た錦・鉄製品などが、家や集落内で威信財として保持されるのと同様の意味で、この際の食品、食器と共に儀式的形式が一部もたらされ、村落や家族内での儀礼に影響を与えたことがありえよう。

中世の東北部では、諸豪族と村落、寺での信仰行事、交易に赴いたアイヌと領主などの関係で同様の関係が起りえたのではなかろうか。アイヌ社会では、東北部へ渡っての和人との交易、南西部の館主との交易がこれに当たろう。近世になってアイヌが年始に献上品をもって松前まで出向き、土産品をもらって帰るウイマムは、この延長線上に位置付けられる。また、藩士が知行地に赴いた折に、地元のアイヌを集めて決まりを伝え、酒、食料、衣類などを与えたオムシャとよばれる儀式も同様である。これと同じ形態が、場所請負商人との間にも成り立っていたようである。アイヌ村落内において、クマ祭りなどにおける食儀式的様相に、外来のものがどのように影響を与えていくか検討する必要があるだろう。

食器に関しては、次のような特色をあげることができる。土師器皿は、中世第1期の東北部のみに限られ、その他はごく少量の移入品のみになること、道央部と東北部では、陶磁器がほとんど遺跡から出土しないことなどである。

これらは、出土例は少ないものの、漆器や木器などの供膳具や貯蔵具が重要視されたことを示すものであろう。この他、各地区から煮炊具としての鉄鍋が数多く出土すること（ただし、対象時期に含まれるものはそれほど多くない）があげられる。これは、鉄製品のリサイクルと関連付けられて論じられることが多い。

2 歴史的特性

(1) 弥生文化の受容形態

東北部から北海道にかけての地域は、縄文時代から共通の文化圏を形成することが多く、晩期には亀ヶ岡文化がここに広がっている。ヒスイ、アスファルト、黒曜石などが各地から集まり、いわば縄文文化の「情報集積地」的な役割を果たしてきた地域である〔福田1994〕。これを背景に、北方文化の展開する地域としての歴史的な特色を形成していくのは、弥生文化の受容形態の違いによるところが大きい。

縄文時代から弥生時代への転換では、水田による稲作農耕文化と青銅器や鉄器の流入と受入れが大きな意味を持った。東北部には遠賀川式土器が流入し、砂沢遺跡や垂柳遺跡では水田跡が確認

表1 北海道の陶磁器出土遺跡

No.	市町村名	遺跡名	遺跡の性格・遺構	遺物	時期	文献
1	江差町	漁港	沈船・港湾	珠洲片口鉢	中世Ⅲ	松崎水穂・百々幸雄・中村公宣1981「北海道洲崎館跡発見の中世遺物と頭骨」『考古学雑誌』67-2
2	上ノ国町	勝山館跡	城館跡	青磁碗・皿・盤 白磁碗・皿・盤?・坏 染付碗皿盤 赤絵盤 珠洲片口鉢 越前片口鉢 瀬戸美濃灰釉碗・皿・袋物 鉄釉碗・皿・袋物・浅鉢 志野 信楽壺 楽茶碗 唐津碗・皿・盤	中世Ⅴ	上ノ国町教育委員会1980～1994「上之国勝山館跡」Ⅰ～ⅩⅤ
3	上ノ国町	洲崎館跡	墓	珠洲片口鉢Ⅴ(P87,第4図1)	中世Ⅳ	松崎水穂・百々幸雄・中村公宣1981「北海道洲崎館跡発見の中世遺物と頭骨」『考古学雑誌』67-2
4	上ノ国町	洲崎館跡	城館跡	越前摺鉢口縁部片(P87,第4図2) 信楽壺口縁部片(P87,第4図3) 青磁碗小片2(P87,第4図4・5) 白磁碗底部片(P87,第4図6)	中世Ⅴ	松崎水穂・百々幸雄・中村公宣1981「北海道洲崎館跡発見の中世遺物と頭骨」『考古学雑誌』67-2
5	上ノ国町	花沢館跡	城館跡	珠洲片口鉢	中世Ⅳ	松崎水穂1993「北海道の城館」『中世の城と考古学』新人物往来社 吉岡康暢1994「中世須恵器の研究」吉川弘文館
6	上ノ国町	竹内屋敷	擦文住居上層	珠洲壺片	中世Ⅰ	大場利夫・松崎岩穂・渡辺兼庸1961「上ノ国遺跡」上ノ国町教育委員会
7	上ノ国町	漁港	沈船・港湾	青磁端反碗(P20,第6図、PL3) 越前摺鉢(P49,第25図249) 美濃瀬戸摺鉢 天目 志野皿 唐津甕・皿・水差・瓶・摺鉢 備前摺鉢 唐津碗・皿・鉢・甕・摺鉢・瓶 伊万里皿 瀬戸美濃摺鉢	中世Ⅳ 中世Ⅴ 近世Ⅰ	上ノ国町教育委員会1987「上ノ国漁港遺跡」
8	上ノ国町	夷王山墳墓群	墓 第74号墳墓集石	瀬戸美濃灰釉皿・碗(P68,第29図1・2)	中世Ⅴ	上ノ国町教育委員会1984「夷王山墳墓群」
9	上ノ国町	比石館跡	城館跡	白磁皿 美濃皿 摺鉢片	中世Ⅴ	松崎水穂・百々幸雄・中村公宣1981「北海道洲崎館跡発見の中世遺物と頭骨」『考古学雑誌』67-2
10	乙部町	元和8		珠洲片口鉢片・青磁碗(P58,第40図1・2)	中世Ⅳ	乙部町教育委員会1977「元和(続)」
11	北桧山町	下若松		青磁碗		松下 亘1984「北海道出土の中国陶磁」『北海道の研究』2
12	瀬棚町	瀬田内チャシ跡	チャシ跡? 和人集落?	青磁皿 赤絵碗 染付芙蓉手皿 染付皿(P29,図9) 伊万里染付碗・皿・德利、白磁香炉 青磁皿 唐津皿・碗(P35,図15) 瀬戸美濃皿(P35,図15) 肥前鉢・片口鉢(P40,図16-118~124)	中世Ⅴ 近世Ⅰ	瀬棚町教育委員会1980「瀬田内チャシ遺跡発掘調査報告書」
13	瀬棚町	南川2	アイヌ墓	越前?片口鉢・唐津?片口鉢(P74,第40図)	中世Ⅴ-近世Ⅰ	瀬棚町教育委員会1985「南川2遺跡」
14	瀬棚町	利別川口	火葬墓	珠洲片口鉢片 美濃灰釉皿	中世Ⅲ-Ⅴ	加藤邦雄1981「瀬棚町発見の火葬墓について」『北海道考古学』第17輯
15	松前町	茂草B遺跡	家跡	珠洲片口鉢(P11,第7図)	中世Ⅲ	松前町教育委員会1979「茂草B遺跡」
16	松前町	福山城跡	城	青磁碗 珠洲片口鉢・壺 越前片口鉢 明染付 清染付 唐津碗・皿・片口鉢	中世Ⅴ-近世Ⅰ	松前町教育委員会1984-95「史跡福山城」Ⅰ-ⅩⅡ
17	松前町	大館跡	城館	青磁皿、染付皿、瀬戸美濃皿、越前片口鉢	中世Ⅴ	松崎水穂1993「北海道の城館」『中世の城と考古学』新人物往来社
18	福島町	穂内館跡	城館	青磁碗・皿・盤(P22,第8図1・3~5) 越前片口鉢(P23,第9図) 青磁碗(P25,図16-1・2) 瀬戸?摺鉢片(P25,図16-3)	中世Ⅴ	福島町教育委員会1972「穂内館」 福島町教委1986「穂内館遺跡」
19	知内町	湧元遺跡	墓	珠洲片口鉢(吉岡第95図14)	中世Ⅴ	吉岡康暢1989「日本海城の土器・陶器」(市立函館博物館蔵)
20	大野町	市渡		越前片口鉢	中世Ⅴ	(大野町郷土館蔵・石本省三氏のご教示による)
21	上磯町	茂別館跡	城館	青磁碗・皿・盤	中世Ⅳ	松下 亘1984「北海道出土の中国陶磁」『北海道の研究』2
22	上磯町	矢不來天満宮跡	神社跡	青磁皿(P47,第31図80) 染付皿(P47,第31図81~84) 白磁皿(P47,第31図85)	中世Ⅳ 中世Ⅴ	北海道埋蔵文化財センター1988「矢不來天満宮跡」
23	上磯町	矢不來館跡	城館	青磁盤・皿・碗 白磁碗・皿 染付碗・皿 越前摺鉢・甕	中世Ⅴ	松崎水穂1993「北海道の城館」『中世の城と考古学』新人物往来社 (落合治彦氏のご教示による)
24	上磯町	ヤギナイ	海浜集落	青磁碗	中世Ⅴ	(落合治彦氏のご教示による)
25	函館市	七重浜		珠洲壺	中世Ⅲ	吉岡康暢1985「北海道の中世陶器」『北海道の研究』2

26	函館市	弥生町	墓	越前片口鉢	中世 V	吉岡康暢1979「北海道の中世陶器」『日本海文化』6 吉岡康暢1989『日本海域の土器・陶器』
27	函館市	西桔梗 N 7 遺跡		珠洲片口鉢 (P48, 第13図1)	中世 IV	函館園開発事業団1974「西桔梗」
28	函館市	志苔館跡	城館	珠洲片口鉢・甕 越前甕・摺鉢 瀬戸三足盤 青磁碗・皿・盤・壺 白磁皿・多角坏・碗 天目茶碗 信楽壺 かわらけ 産地不明甕	中世 IV	函館市教育委員会1986「史跡志苔館跡」
29	函館市	志海苔蓄銭遺構	蓄銭	越前大甕(1号)(吉岡第97図17)越前大甕(2号) 珠洲大甕(3号)(吉岡第96図19)	中世 III - IV	函館市立博物館1969『函館市志海苔町の蓄銭遺構』 吉岡康暢1989『日本海域の土器・陶器』
30	戸井町	戸井館跡	城館	珠洲片口鉢 (P122, 第2図6、吉岡第94図12)	中世 IV	千代肇1969「中世の戸井館址調査報告」『北海道考古学』第5輯
31	森町	森川町貝塚	貝塚	珠洲片口鉢(吉岡第98図1・2) 青磁碗、白磁碗	中世 IV	(北海道開拓記念館熊野喜三コレクション) 吉岡康暢1989『日本海域の土器・陶器』
32	森町	御幸町	墓の脇	青磁碗	中世 IV	森町教育委員会1985「御幸町」
33	虻田町	入江貝塚		赤絵小鉢	中世 V - 近世 I	(大島直行氏のご教示による)
34	伊達市	有珠 7	貝塚上	明赤絵(五彩)	中世 V	伊達市教育委員会1984「有珠 7 遺跡」
35	伊達市	有珠善光寺	貝塚・墓	美濃	中世 V	峯山巖1965「有珠善光寺の墓」『北海道の文化』8
36	伊達市	ボンマ	海浜集落	青磁碗(図52-20)	中世 IV	伊達市教育委員会1993「伊達市有珠オヤコツ遺跡・ボンマ遺跡」
37	伊達市	有珠オヤコツ砂丘	貝塚 SH004	染付片(P19.14 図13)		伊達市教育委員会1992「有珠オヤコツ砂丘遺跡」
38	室蘭市	絵鞆遺跡 A 地区	チャン	珠洲片口鉢 (P67, 第6図)	中世 IV	室蘭市教育委員会1971「室蘭絵鞆遺跡発掘調査概要報告書」
39	苫小牧市	静川22遺跡		瀬戸美濃灰釉碗(P90, Ph30-54)	中世 V	苫小牧市埋蔵文化財センター他1984「苫小牧東部工業地帯埋蔵文化財発掘調査概要報告書」VI
40	平取町	ユオイチャン跡	チャン	明染付碗口縁部片(P47, 図24)	中世 V - 近世 I	道埋蔵文化財センター1986「ユオイチャン跡・ポロモイチャン跡・二風谷遺跡」
41	平取町	ポロモイチャン跡	チャン	絵唐津大皿(P74, 図34)	中世 V - 近世 I	道埋蔵文化財センター1986「ユオイチャン跡・ポロモイチャン跡・二風谷遺跡」
42	平取町	二風谷遺跡	集落	明染付碗(P54, 第32図1)染付蓋物(P54, 第32図1)	中世 V - 近世 I	平取町他1987「二風谷遺跡」
43	平取町	イルエカシ遺跡	集落	肥前染付碗・皿 唐津系天目・摺鉢 備前系摺鉢	近世 I	平取町遺跡調査会1989「イルエカシ遺跡」
44	釧路町	遠矢第2チャン跡	チャン跡	白磁皿(P66, 第32図) 陶版第32-93)	中世 V	北海道教育委員会1975「遠矢第2チャン跡遺跡調査報告書」
45	寿都町	朱太川右岸	墓	珠洲片口鉢(P32.19 図7-37、吉岡第93図10)	中世 IV	寿都町教育委員会1963「寿都遺跡」
46	寿都町	樽岸(東北大学喜田貞吉採集)	海浜集落	珠洲片口鉢(吉岡第94図13)	中世 IV	吉岡康暢1989『日本海域の土器・陶器』
46	寿都町	朱太川左岸	海浜集落	珠洲片口鉢(P422, 第314図35) 摺鉢(P422, 第314図37, 38)	中世 IV	寿都町教育委員会1980「寿都町文化財調査報告書」II
47	神恵内	神恵内観音洞窟	洞窟遺跡	珠洲小形甕(吉岡第93図2)・片口鉢	中世 IV	吉岡康暢1989『日本海域の土器・陶器』
48	余市町	神恵内観音洞窟	F層下土壌	珠洲片口鉢(P233, P234 第4図1・2)	中世 II	宇田川洋・河野本道1984「神恵内観音洞窟遺跡の遺物」『河野広道博士没後二十年記念論文集』
48	余市町	大川	海浜集落	珠洲壺 珠洲片口鉢・壺・小壺 青磁碗・皿 白磁碗・皿 鉢 染付碗 瀬戸平碗・天目碗・小皿・卸皿・平鉢・筒型・三足盤 瀬戸小鉢 信楽壺	中世 III - IV	余市町教育委員会1995「1994年度大川遺跡発掘調査概報」 余市町教育委員会1991「1990年度大川遺跡発掘調査概報」
49	余市町	大浜中	貯蔵	明染付皿・碗 清染付小碗 肥前磁器 青磁碗・皿、美濃天目	近世 I 中世 V	余市町教育委員会1992「1991年度大川遺跡発掘調査概報」 余市町教育委員会1995「1994年度大川遺跡発掘調査概報」 松下 亘1984「北海道出土の中国陶磁」『北海道の研究』2
50	余市町	天内山	チャン跡・貝塚	明染付?、越前?摺鉢(P108, 第24図版)	中世 V	余市町教育委員会1971「天内山」
51	千歳市	ユカンボシ 2	集落	明染付?	中世 V	遺跡報告会資料・千歳市教育委員会豊田宏良氏のご教示による
52	千歳市	末広	竪穴住居跡覆土	珠洲片口鉢 小甕(上 P75, Fig51) 染付小皿(上 P120, Fig95、下 P272, Fig270) 瀬戸美濃小皿(上 P120, Fig95、下 P272, Fig270) 摺鉢(下 P272, Fig270)	中世 IV 中世 V	千歳市教育委員会1981・82「末広遺跡における考古学的調査」(上・下)
53	千歳市	釜加	チャン?	備前系摺鉢	近世 I	千歳市教育委員会ほか1967「千歳遺跡」
54	千歳市	美々 8	船着場	珠洲片口鉢(P296, 図 VII - 41)	中世 IV	北海道埋蔵文化財センター1990「美沢川流域の遺跡群 XIII」
54	千歳市	美々 8 低湿部		白磁端反皿(第2分冊 P22, 図 VI - I)備前系摺鉢	中世 V	北海道埋蔵文化財センター1992「美沢川流域の遺跡群 XV」

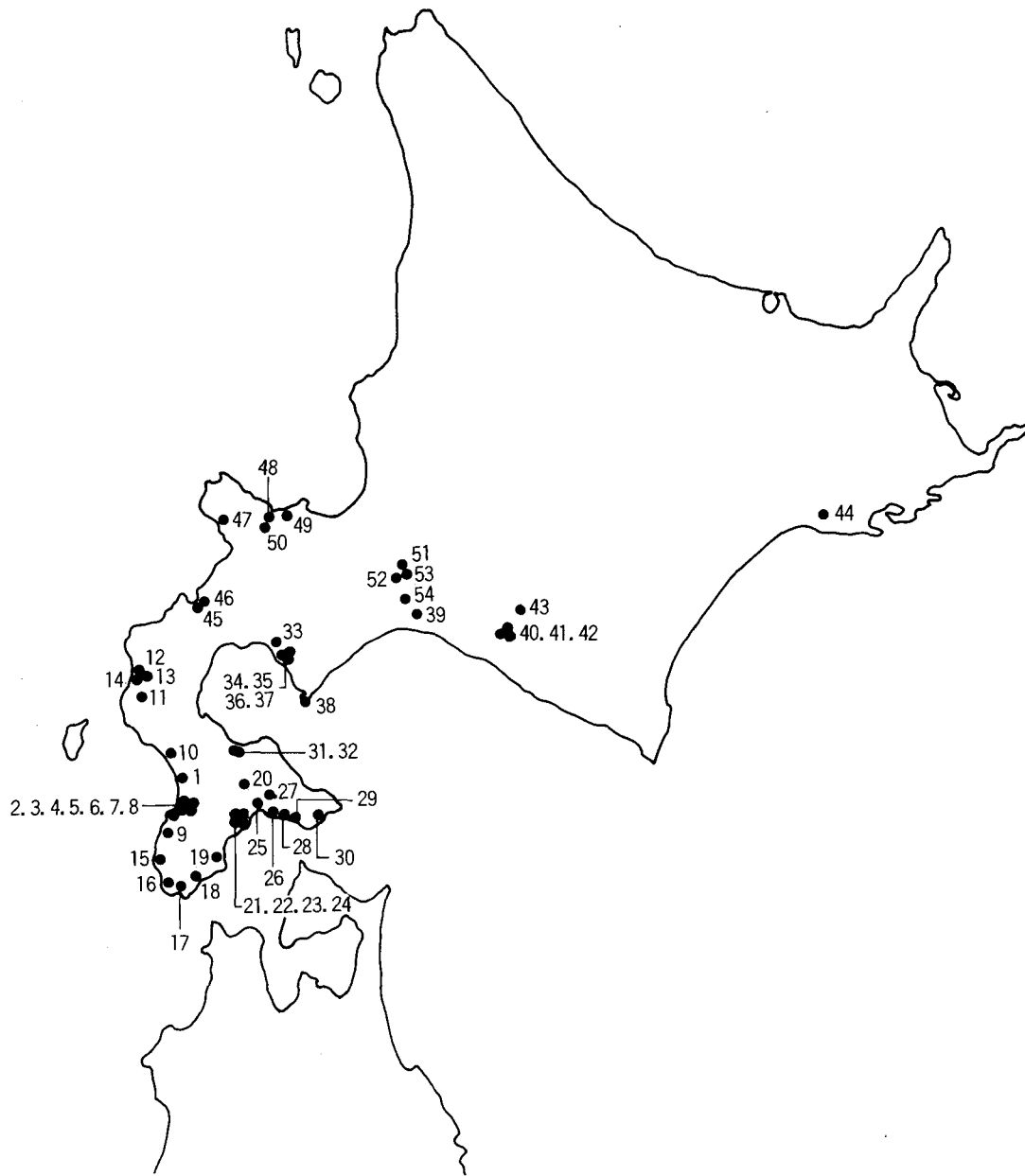


図1 北海道の陶磁器出土地 (番号は表1と一致)

されている。また粃痕を残す土器も各地で見つかりしている。だが水田耕作はそのまま定着せず、石器の組成についても、弥生文化より統縄文文化と共通性があることが指摘されている〔須藤・工藤 1994〕。古代になって改めて稲作が導入された可能性が高い。

北海道では稲作農耕の定着はなく、金属器の導入がなされるに留まったとされている。たとえ水田耕作が行われたとしても一部の地域に限られ、生業の主流となったとはほとんど考えられない。そのため、生産構造は縄文文化と大きく変化することなく、狩猟採集経済と若干の雑穀栽培が続いたと考えられており、本州と区別する形で、統縄文文化 (時代) と呼ばれている。

東北部では、弥生時代後期になると、天王山系といわれる東北地方の特色を持った土器が流入し、わずかな量ではあるが北海道南西部と道央部にまで広がる。これとほぼ期を一にして、北海道内で成立したと考えられる土器型式（後北式）が、東北部から一部新潟の沿岸地方に広がる。絶対年代についてはまだ決定的なものはないが、ほぼ後北 C₁ 式が 3 世紀、後北 C₂・D 式が 4 世紀と考えられる。またこれに後続する北大式が、東北部から北上川流域にかけて多くみられる。北大 I 式は 5 世紀、同 II 式は 6 世紀と考えておく。

これらの北海道的特色をもつ土器が広がる時期は、大陸では中国の三国時代から南北朝期、特に五胡十六国に見る北方諸民族の南下の時代に当たっている。北海道に大陸・樺太系統とされる鈴谷式、それに次いでオホーツク土器が出現するなどの現象を、寒冷期と関連させて考える説もある。ただ、東北部における北海道系の土器の出現を、「南下」とすることが多いが、先程も述べたように、この地域は古くからかなり均一性の高い文化圏を形成していたことが、このような現象を起こしたものと言えよう。ちなみに、現在のアイヌ語起源と考えられる地名が濃密に残っており、この分布圏がこの土器形成のそれに近いことが指摘されている。日本史における「えみし」問題とのつながりが論議される点である。

この時期、本州の文化が断片的であるが東北部を経て北海道へ流入する。後北式期に璧玉製管玉、ガラス玉、堅櫛、北大式期には 5・6 世紀代の須恵器や土師器、石製模造品の石製刀子などである。しかし両地域では、弥生時代と古墳時代に相当する時期に、国家の形成は認められず、前方後円墳に代表される大型の古墳の築造もなされていない。このような状況は、律令国家の形成と北方経営政策に伴い、7 世紀に土師器を持つ集落が東北部に営まれ、北海道でも本州文化の影響の強い擦文文化が成立するまで続く。

（2）国家領域の拡大と境界領域

7 世紀中頃、大化の改新以降に北方関係の記事が文献に多くみられるようになる。そのなかで一つの画期と考えられるのが、阿倍比羅夫北征記事と称せられるものである（658-660年）。この記事には津軽蝦夷、渡島蝦夷、肅慎の名がみられる。多くの説があるが、津軽蝦夷は津軽半島周辺の蝦夷、渡島蝦夷は北海道南西部から道央部の蝦夷、肅慎は日本海側とオホーツク海沿岸に南下していたオホーツク文化のにない手を指すものであろう。この時点で、畿内を中心にした国家勢力が北海道の道央部付近にまで勢力を伸ばし、東北部とも朝貢関係をもっていたことを示す記事と言えよう。

考古学的には、東北部で 7 世紀前半から土師器を出土する集落がみられるようになり、8 世紀にかけてその数が増えていく。また 7 世紀後半には末期古墳の流れを組む盛土墳が出現する。集落内から栽培植物の種子がみられる例が多くなり、いわゆる農耕集落が広がってきたことを示している。

北海道内にも、7 世紀代の土師器を持つ集落が南西部と道央部にみられるようになる。このような土師器文化の影響を受けて、擦文文化が成立していく。堅穴住居跡は方形の平面形を持ち、壁面にかまどが築かれるようになる。土器は縄文がなくなり、口縁部に横走る沈線が描かれるだけで、無文化の傾向を持つ。また墓では、7 世紀頃から豊富な鉄製品を持つ土壙墓が道央部を中心に出現する。さらに 8 世紀代には末期古墳と関連するいわゆる「北海道式古墳」が石狩低地帯に築かれている。このような本州土師器文化との共通性を持つ擦文文化の成立には、道央部にまで入り込んだ

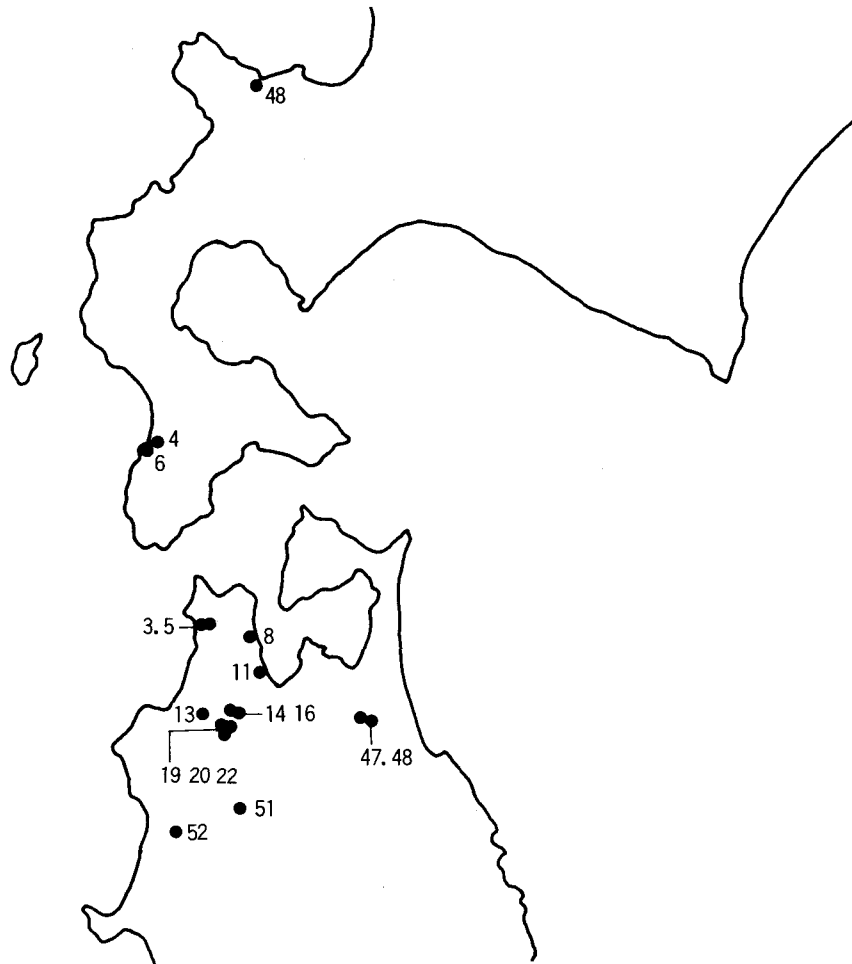


図2-1 中世II期の陶磁器出土遺跡 (番号は表1と一致)

律令国家と関連を持った人々による、政治的圧力がかかっていた可能性がある。

道北部では、オホーツク文化が成立している。オホーツク文化はオホーツク海沿岸に広がる海洋性文化で、極度に発達した骨角器を製作し、大陸製の鉄斧、鉄矛、帯金具、ガラス玉などを所有していた。生業活動は、骨製銛を利用した海獣狩猟や漁撈が中心であると考えられてきた。しかし最近の調査から、これらの遺跡でも栽培植物種子が出土し、農耕が行われたことが明らかになった〔山田悟郎ほか1991〕。沿海州方面の農耕との関連が、豚の飼育と共に考えられている。注目すべき点は、大陸系統の物質文化だけでなく、これと共に土師器や蕨手刀が出土することから、律令国家との結び付きも考えられることである。7・8世紀の文献にみえる肅慎に比定する一つの理由である。

(3) 9世紀末の変化

7・8世紀代から9世紀にかけて、律令国家勢力の最先端となる城柵が築かれる範囲は、東北部としてくくった地域の南側であった。9世紀初頭坂上田村麻呂が蝦夷経営の安定期をもたらしてからも、東北部へは城柵が築かれた形跡はない〔進藤1994〕。一方考古学的には、この時期の土師器は、東西南部と斉一性をもって変化することが指摘されている〔三浦1994〕。また、北陸型の



図2-2 中世Ⅲ期の陶磁器出土遺跡

煮炊具であるたたき目を持つ甕，鍋型土器が出土するなど，広域的に土器の共通性がみられる時代である。ただ，須恵器窯は北部にはみられず，鉄生産遺跡とともに，この地域にまで及んでいないことが指摘できる。

このような状況を，東北部，道南部，道央部へ律令国家の直接的な介入はないものの，それぞれに独自の勢力があり，個々に城柵と結びつきを持った時期ととらえてみたい。いわば平和共存の時期といってもいいかもしれない。特殊な例であるが，墨書土器や篋書土器が道央部にまで流入しており，「夷」の略字体とされる「夫」字が書かれた例がある。蝦夷が出羽柵など律令国家の出先機関に出向き，饗給を受けた際に授けられた可能性がある。

9世紀末から10世紀前半にかけての蝦夷の乱，それに続く10世紀中頃から12世紀にかけて安倍氏，清原氏の奥六郡支配によって，東北部の独自性が生じて来る。同時に北海道では無文化の傾向と逆行する「刻文」を持つ擦文土器の展開を見るに至る。

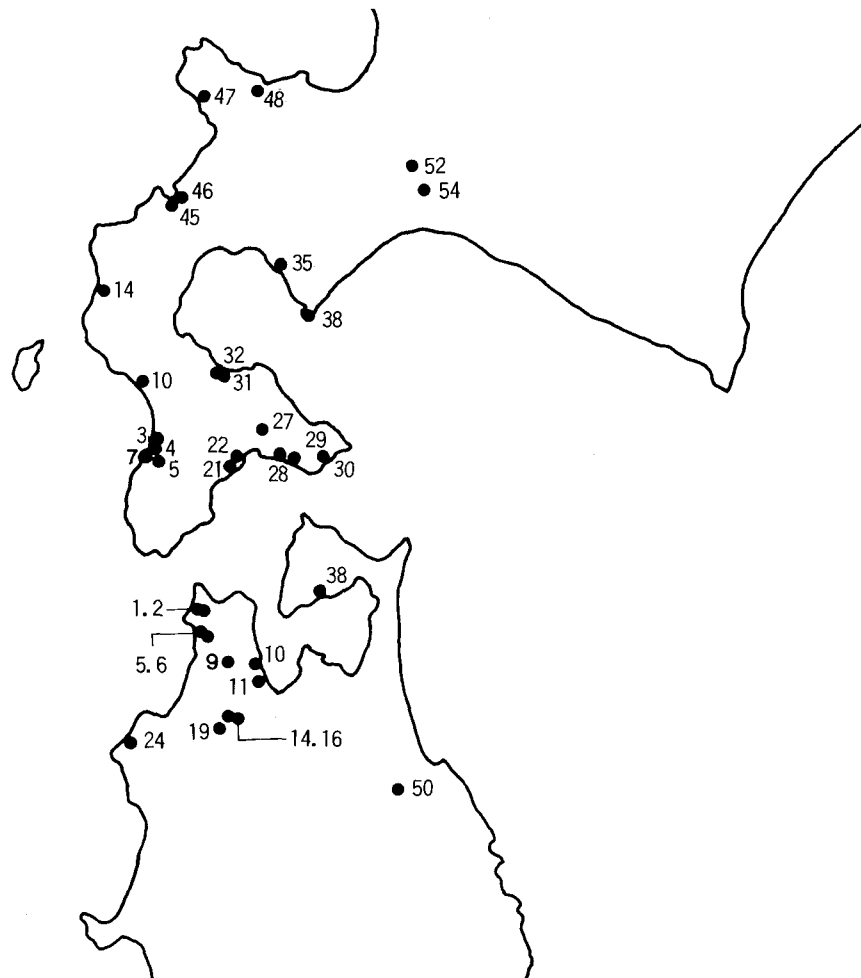


図2-3 中世IV期の陶磁器出土遺跡

①……………陸奥北部(青森・秋田北部)

[古代後II期] (アンダーラインは搬入品)

食膳具—土師器坏, 須恵器坏, 灰釉碗, 木器杯・椀

煮炊具—土師器長甕・鍋形土器・羽釜, 把手付鍋, 擦文甕, 鉄鍋

貯蔵具—土師器甕, 内面黒色壺, 須恵器短頸壺・長頸壺・甕

東北北部の独自性が現れる時期である〔三浦1994〕。五所川原窯跡群に代表される須恵器窯の確立, 秋田県北部と岩木山麓に広がる竪型炉を備えた鉄生産遺跡の出現は, これまで蝦夷の世界になかった技術が東北北部に流入していることを示している。集落からは, 鉄製品, 須恵器が数多く出土し, 鍛冶遺構も伴っている。

この時期, 津軽方面では, 岩木川水系の平野部の微高地上や低い段丘上に集落が築かれていく。また日本海側では津軽を中心に, 集落全体を壕や柵で囲った「津軽型高地性防御集落」が営まれる。一方太平洋側では, 「上北型高地性防御集落」が築かれる。比高差50mほどの河川や湖に面した丘

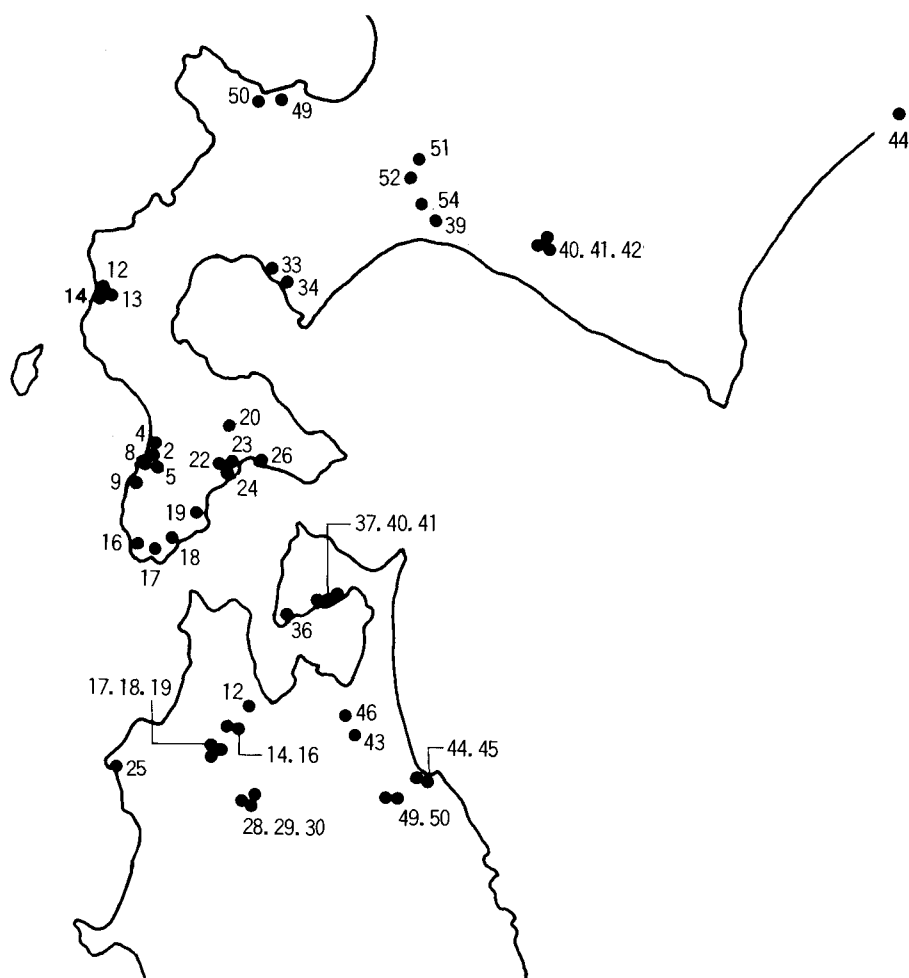


図 2-4 中世V期の陶磁器出土遺跡

陵の先端を孤状や楕円状に空堀りで区画し、この区画内に数件の竪穴住居跡を取り込み、区画外の平坦面には20～30軒の竪穴を擁する構造のものである〔三浦1991〕。このような集落の出現は、政治的・軍事的緊張関係を背景にしたもので、上北、津軽方面にそれぞれまとまった勢力が存在したことが考えられる。これは律令国家から移り変わった王朝国家の勢力と直接対決するものではなく、集団間の抗争や、安倍氏、清原氏などの俘囚政権との関係を考えた方がよいのではなかろうか。須恵器や鉄生産の自立を目指したのもこの動きと一貫としてとらえることができよう。

ところで、このような緊張関係の背景の一つには、蝦夷地をめぐる交易権、または交易品をめぐる争いがあったと考えられる。王朝国家が金、馬、毛皮、鷹の羽、昆布などの蝦夷の産品を強く求めるようになったのは、12世紀の歌のなかにしばしば「蝦夷」が読み込まれるようになることから推測することができる。そおらく国府段階での交易品獲得のための積極姿勢が蝦夷を刺激し、安倍、清原など俘囚政権の誕生へとつながった可能性がある。津軽蝦夷の集団も、独自に渡島蝦夷との交易網を形成したのであろう。

食文化の面では、土器の組成変化が認められる。供膳具では、土師器坏が次第に減少し、これにあわせて須恵器坏は10世紀後半頃なくなる。わずかではあるが、六ヶ所村沖附（1）遺跡（折戸53

号様式の灰釉陶器高台付き小皿), 八戸市熊野堂遺跡(灰釉陶器瓶子の頸部片が2点), 平賀町旧大光寺城遺跡などで灰釉陶器が見うけられる。最北端の分布を示すものである。一方でこの時期は, 木器の普及期としてとらえることができ, 大鰐町大平遺跡では木器の製作過程を示す炭化した椀が, 同町砂沢平遺跡ではロクロ使用の椀が見られる。鉄器の普及と回転台(ロクロ)使用などの技術の進歩に裏付けられ, 木器(漆器)製作が量産化に向かう。

煮炊具では, 伝統的な長甕のほか, 9~10世紀にかけて鍋形土器, 11世紀代には蒸籠形甑, 11世紀中頃から把手付土器がある。把手付土器は, 9世紀頃まで相馬方面の製鉄・鑄造遺構などで製作されていたような, 把手付鉄鍋を模した可能性があることが指摘されている〔飯村1195〕。鉄器そのものも流入していたようで, 八戸市熊野堂遺跡では10世紀代とされる鉄鍋がある。ところで煮炊具としての機能と直接関係はないが, 底面に砂粒を附着させた「砂底土器」がある。十和田a火山灰と白頭山-苦小牧火山灰前後から出土する土器に集中してみられ, その分布は岩手北部, 秋田北部, 青森, 北海道⁽²⁾にわたる。ここで述べた東北北部の独自性と関連するものである。

貯蔵具は, 各種須恵器製品が主体であるが, この時期の終わり頃には減少し, 特殊なものでは内面黒色の壺が見られるようになる。

なお, コメ, アワ, ヒエなどの栽培植物種子が, 多くの遺跡から検出されている。

[中世I期]

食膳具—土師器坏, 柱状高台坏 白磁

煮炊具—土師器長甕・羽釜・蒸籠形土器・把手付鍋・内耳土鍋, 擦文甕, 鉄鍋

貯蔵具—内面黒色壺

11世紀後半代は, 供膳具の坏・皿が少ない。須恵器は見られず, ロクロ整形土師器のみである。大小に分化し, 底の厚くなるのも見られる。また黒石市板留遺跡, 浪岡町杉ノ沢遺跡で竪穴住居跡から出土した白磁皿は, この時期に属するものであろう。煮炊具では, 長甕のほか, 石上神社遺跡, 蓬田大館遺跡などでは羽釜が見られる。蒸籠形甑も残る。また把手付土器が盛行している。蓬田大館遺跡では内耳土鍋がある。鉄器の流入(製作?)が盛んになり, 碓ヶ関村古館遺跡の内耳鉄鍋, 蓬田大館遺跡の鉄鍋片などがこの時期に属する。貯蔵具は, 内面黒色の壺や甕が受け継がれる。須恵器製品は殆ど消滅する。

12世紀前半は, 東北北部で遺物の組み合わせがはっきりしなくなる時期である。食膳具は, 土師器の皿が主体で量は少ない。いわゆる柱状高台坏も見られる。煮炊具は長甕がなくなり, 把手付土器が少量残る。おそらく, 鉄鍋や内耳土鍋が主体になったのであろう。貯蔵具ははっきりしない。

[中世II期]

食膳具—土師器坏(ロクロ使用)・土師器坏(手づくね), 白磁碗・皿, 青磁碗・皿, 瀬戸皿,
木器(漆器)杯・椀

煮炊具—内耳鉄鍋, 内耳土鍋

調理具—珠洲系片口鉢

貯蔵具—渥美壺・甕, 常滑壺・甕, 珠洲壺・甕, 瀬戸瓶子

津軽が陸奥国に組み入れられると共に, 奥州藤原氏の伸長によって東北北部もその影響下に入り, 11世紀代のような独自性が見られなくなる。すなわち, 平泉に見られる陶磁器が東北北部に及び,

津軽を中心として多くの遺跡から出土する。青森県弘前市中崎館，秋田県大館市矢立廃寺の様に，中国陶磁器，国産陶磁器，京都系かわらけ，在地系からわけが組み合わされて出土する遺跡と，青森市内真部（4）遺跡，浪岡町浪岡城内館の様に遺構がはっきりしない遺跡，珠洲系四耳壺や白磁が単独で発見されている遺跡などがある。この時期の遺跡は，藤原氏が整備した「奥大道」といわれる街道沿い，つまり秋田雄物川上流域から津軽方面に多いが，太平洋側では七戸町で出土しているにすぎず，大きく様相を異にしている。

図版には，青森県浪岡町浪岡城内館〔浪岡町教育委員会1988〕の土師器皿（かわらけ）と，弘前市中崎館〔青森県教育委員会1990〕のSD01堀跡出土遺物を主体に掲載した。土師器坏にはロクロ使用の口径8cm前後の小型のもの，13cm前後の大型のもの，非ロクロ製で口径8cm前後の小型のもの，13cm前後の大型のものに分けられる。これらの陶磁器の組合わせは，平泉を中心とする藤原氏の遺跡とほぼ同様である。なお堀跡からは擦文土器の破片が出土している。堀跡であるため，共伴関係について明確でないが，土師器が殆ど出土せず，擦文土器だけが出土する点で注目する必要がある。擦文土器の問題については別に考えてみたい。

供膳具は，中国産の白磁と青磁の碗・皿が使われ，これに瀬戸皿が加わる。かわらけは平泉から大量に出土していることから，儀式に伴う酒宴など一回の使用で廃棄される用途が考えられる。また陶磁器も，灰釉陶器を除きこれまでに見られなかった新しい遺物である。坏・皿は一時量が少なくなった器種であることも考えると，日常食器とは考えにくい。東北部が藤原氏の勢力下に組み入れられていくに従い，儀式そのものがもたらされた可能性がある。

煮炊具は，土師器長甕はみられず，平泉柳の御所跡，山形県升川遺跡で出土している内耳鉄鍋が主体となろう。柳の御所跡では内耳土鍋も出土しており，共に使用されていたと考えられる。

調理具として珠洲系片口鉢が出現する。貯蔵具としても珠洲系陶器の甕・壺が見られ，珠洲系陶器分布圏に組み入れられていることがわかる。この時期秋田県米代川流域の二ツ井町に珠洲系のエヒバチ長根窯が築かれる。珠洲からの製品を補完する形で，出羽・陸奥両国北部に供給されていたと考えられている。

貯蔵具には，渥美や常滑の製品が流入している。瀬戸の製品もみられるので，西日本から北日本にかけての広大な流通圏が成立していたことがわかる。これを担う海上交通と，河川・陸道を利用した内陸交通の整備がこの背景にあることはいうまでもない。鉄鍋の流通も，同様な経路を利用したものと考えることができる。

この様な流通システムは，鎌倉幕府による藤原氏征討によって一旦崩され，幕府の手によって再整備されたのであろう。12世紀後半の平泉を中心とした遺物群は，次の段階で大きく変貌する。かわらけの欠落と，日本海側における珠洲系陶磁器の一元的供給である。さらに多量の貿易陶磁器が安藤氏の手によって流入することが，東北部の大きな特色となっていく。逆にいえば，地元で生産される土器が消えたわけで，エヒバチ長根窯が築かれて以降，近世陶器窯が開設されるまで，本格的な土器製作は行われなかったのではないだろうか。中世諸窯が設立されている東南北部とは，一線を画する。

表2 東北北部の陶磁器出土主要遺跡

市町村	遺跡名	主要時期	文 献
青森県			
1 小泊村	弁天崎	中世Ⅳ	小泊村教育委員会・小泊の歴史を語る会1985『弁天島遺跡発掘調査報告書』
2 小泊村	兎沢	中世Ⅳ	佐々木達夫1981「日本海の陶磁交易」『日本海文化』p.12
3 市浦村	檀林寺(伝山王坊跡)	中世Ⅱ	市浦村教育委員会・山王坊跡調査団1987『青森県北津軽郡市浦村山王坊跡昭和五七～昭和六二年度調査中間報告』
4 市浦村	福島城	古代	千田嘉博ほか1993「福島城・十三湊遺跡1991年度調査概報」『国立歴史民俗博物館研究報告』第48集
5 市浦村	十三湊	中世Ⅱ-Ⅳ	半沢 紀1991「琴湖岳遺跡採集の陶磁器」『歴史と文化誌 津軽平野』第3号
		中世Ⅱ-Ⅳ	千田嘉博ほか1993「福島城・十三湊遺跡1991年度調査概報」『国立歴史民俗博物館研究報告』第48集
		中世Ⅳ?	平山久夫・香取昂宏1972「津軽十三湊採集の古瀬戸陶片」『北奥古代文化』第4号
6 市浦村	相内	中世Ⅳ	鈴木古観1976「青森県出土の陶器二例」『考古風土記』創刊号
7 今別町	大開城	中世Ⅲ	佐々木達夫1982p.12
8 蓬田村	蓬田大館	中世Ⅰ・Ⅱ	早稲田大学文学部1987『蓬田大館遺跡』 佐々木達夫他1983「津軽・蓬田大館の発掘-1981年-」『日本海文化』第10号
9 中里町	中里城跡	中世Ⅳ	中里町教育委員会1990『中里城跡』Ⅰ 中里町教育委員会1991『中里城跡Ⅱ・平山西』 中里町教育委員会1991『中里城跡』
10 青森市	尻八館	中世Ⅳ	青森県立郷土館1981『尻八館調査報告書』
11 青森市	内真部(4)	中世Ⅱ・Ⅳ	青森県教育委員会1994『内真部(4)遺跡』
12 青森市	油川城	中世Ⅴ	中村和彦1984「青森市油川城跡から出土した中世資料」『考古風土記』9
13 五所川原市	荒神林	中世Ⅱ	半沢 紀1993「中世陶磁器類」『五所川原市史 資料編Ⅰ』
14 浪岡町	源常平館	中世Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ	青森県教育委員会1978『源常平遺跡発掘調査報告書』
15 浪岡町	杉の沢	中世Ⅰ	浪岡町教育委員会1979『浪岡町杉の沢遺跡発掘調査報告書』
16 浪岡町	浪岡城	中世Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ	浪岡町教育委員会1978-88『浪岡城跡』Ⅰ-Ⅸ
17 弘前市	堀越城	中世Ⅴ	弘前市教育委員会1978『堀越城跡』
18 弘前市	弘前城	中世Ⅴ	弘前市教育委員会1975・76・77・78・79『史跡弘前城跡環境整備事業』
19 弘前市	境関館	中世Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ	青森県教育委員会1987『境関館跡遺跡』
20 弘前市	独狐	中世Ⅱ~Ⅴ	青森県教育委員会1986『独狐遺跡』
21 弘前市	茶毘館	中世Ⅳ	青森県教育委員会1988『茶毘館遺跡』
22 弘前市	中崎館跡	中世Ⅱ	青森県教育委員会1990『中崎館遺跡』
23 鱒ヶ沢町	赤石		工藤清泰1994「中世・近世遺跡の概観」『弘前市史資料編Ⅰ』
24 鱒ヶ沢町	浜横沢町	中世Ⅳ	青森県立郷土館考古研究部1994「青森県立郷土館所蔵の古代・中世の遺跡」 『青森県立郷土館調査研究年報』18、p.31-36
25 深浦町	元城	中世Ⅴ	佐々木達夫1981 p.11(深浦町教育委員会蔵)
26 黒石市	高館	中世Ⅰ	青森県教育委員会1978『黒石市高館遺跡発掘調査報告書』
27 黒石市	板留(2)	中世Ⅰ	青森県教育委員会1980『板留(2)遺跡発掘調査報告書』
28 平賀町	烏海山	中世Ⅴ	青森県教育委員会1977『烏海山遺跡発掘調査報告書』

29	平賀町	杉館	中世 V	佐々木達夫1981 p.9(平賀郷土館蔵)
30	平賀町	五輪堂遺跡	中世Ⅲ・V	青森県教育委員会1980『五輪堂遺跡発掘調査報告書』
31	平賀町	富山遺跡		青森県教育委員会1975『富山遺跡・永泉寺跡発掘調査報告書』
32	平賀町	永泉寺跡		青森県教育委員会1975『富山遺跡・永泉寺跡発掘調査報告書』
34	碓ヶ関村	大面		青森県教育委員会1980『大面遺跡発掘調査報告書』
35	東通村	浜通	近世 I	青森県教育委員会1984『浜通遺跡発掘調査報告書』
36	脇野沢村	瀬野	中世 V	森本岩太郎・橘善光1974「下北半島西通発見の人骨と陶器」『北奥古代文化』 6
37	川内町	宿野辺	中世 V	森本岩太郎・橘善光1974「下北半島西通発見の人骨と陶器」『北奥古代文化』 6
38	川内町	熊野平	中世 IV	森本岩太郎・橘善光1974「下北半島西通発見の人骨と陶器」『北奥古代文化』 6
39	川内町	内田野沢		森本岩太郎・橘善光1974「下北半島西通発見の人骨と陶器」『北奥古代文化』 6
40	川内町	蠣崎城	中世 V	佐々木達夫1981 p.17(川内町寺田徳徳氏蔵)
41	川内町	鞍越城	中世 V・近世 I	富岡一郎1978「下北郡川内町板子塚出土の陶磁器について」『東奥文化』 49, p.17-22
42	横浜町	牛ノ沢館	近世 I	福田友之ほか1986「南部町聖寿寺館・十和田湖町三日市館・横浜町牛ノ沢館跡等発見の陶磁資料」 『弘前大学考古学研究』 第3号
43	十和田湖町	三日市館	中世 V・近世 I	福田友之ほか1986「南部町聖寿寺館・十和田湖町三日市館・横浜町牛ノ沢館跡等発見の陶磁資料」 『弘前大学考古学研究』 第3号
44	八戸市	根城	中世Ⅲ - V・近世 I	八戸市教育委員会1979-90『史跡根城発掘調査報告書』 I - XII 八戸市教育委員会1993『根城一本丸の発掘調査一』
45	八戸市	赤御堂	中世 V・近世 I	八戸市教育委員会1988『赤御堂遺跡』
46	七戸町	七戸城跡	中世 V	七戸町教育委員会1988-89『矢館跡』 I - III 七戸町教育委員会1991-94『史跡七戸城北館』 I - IV
47	七戸町	曾我森	中世 II	鈴木古観1976「青森県出土の陶器二例」『考古風土記』 創刊号
48	七戸町	左組(3)	中世 II	小山彦逸1991「考古学からみた七戸町」
49	南部町	聖寿寺館	中世 V	福田友之ほか1986「南部町聖寿寺館・十和田湖町三日市館・横浜町牛ノ沢館跡等発見の陶磁資料」 『弘前大学考古学研究』 第3号
50	南部町	宮館板碑群	中世 IV - V	福田友之ほか1986「南部町聖寿寺館・十和田湖町三日市館・横浜町牛ノ沢館跡等発見の陶磁資料」 『弘前大学考古学研究』 第3号
秋田県				
51	大館市	矢立廃寺	中世 II	大館市史編纂委員会1973『矢立廃寺発掘調査報告書』
52	二ツ井町	エヒバチ長根窯跡	中世 II	二ツ井町教育委員会1990『エヒバチ長根窯跡・大川口館跡・鳥野遺跡』

[中世 III 期]

食膳具—白磁碗・皿，青磁碗・皿
調理具—珠洲系片口鉢，瀬戸卸皿
煮炊具—内耳鉄鍋
貯蔵具—珠洲壺・甕

13世紀になると、遺跡数と遺物量が少なくなり、遺構に伴って出土する例はわずかである。大半が珠洲系陶磁で、少量の瀬戸製品と舶載陶磁器が加わる。

境関館跡〔青森県教育委員会1987〕からは、中世 II 期後半から中世 IV 期にかけての遺物が出土している。中世 III 期はそれほど量が多くないが、供膳具として青磁碗と白磁碗，調理具として瀬戸の卸皿と珠洲片口鉢，貯蔵具として珠洲の壺と甕がある。中国製品は、13世紀後半から出現する。

煮炊具と関連するものとして、かまど遺構が129基検出されている。基本的に半地下式で、焚口部、燃烧部、煙道部で構成されるが、様々な形態がある。青森、岩手、秋田、北海道に分布しており、13世紀から近世にかけて存続した〔三浦1987〕⁽³⁾。古代のかまどが竪穴住居跡とともになくなり、中世のかまど遺構が掘立柱建物跡、竪穴建物跡、井戸跡と組合って出現する。煮炊の場所はかまど遺構と焼土がある竪穴建物跡と考えられる。

[中世 IV 期]

食膳具—白磁碗・皿・坏，青磁碗・皿，瀬戸美濃碗・皿，木器（漆器）杯・椀
煮炊具—内耳鉄鍋・吊耳鉄鍋
調理具—珠洲系片口鉢，瀬戸美濃瓶子・大鉢
貯蔵具—珠洲壺・甕，越前壺・甕，信楽壺，黒陶壺，朝鮮壺，木製品（曲げ物）
関連具—木製品（箸・折敷），石臼・茶臼

この時期は遺跡数が増え、遺物の出土量が増大する。特に舶載陶磁器が増加するのが目立つ。津軽安藤氏の勢力が安定し、「日の本將軍」の名が使われる時期である。14世紀頃から津軽と若狭を結ぶ「津軽船」によって日本海北部が結ばれ、十三湊を中心とする海運網が東北北部に出来上がったことが指摘されている。この海運網の一部は北海道南西部に及んでおり、樺太方面へも伸びたことが想像される。また一方で、日本海対岸の沿海州、朝鮮半島、さらには中国とも結ばれていた可能性がある⁽⁴⁾。

境関館跡出土遺物の主体はこの時期のものである。食膳具は、白磁碗（3個体、以下個体数）・皿（24～26）、青磁碗（66）・稜花皿（7）・盤（2）・鉢（1）、瀬戸灰釉折縁深皿（2）・平碗（22）・天目碗（10）と青磁瓶子（1）、瀬戸壺（1）である。舶載陶磁器が国産品に比べ圧倒的に多くなる。煮炊具は、鉄鍋と鉄釜片が出土している。調理具は珠洲片口鉢が多く、IV 期と V 期を合わせると100個体を越す。貯蔵具も珠洲壺（20）・甕（21）が主体である。

青森市尻八館跡〔尻八館調査委員会1981〕は、青森県における中世城館跡調査の嚆矢となった遺跡である。14・15世紀の遺物が主体であるが、伝世品と考えられる竜泉窯青磁浮牡丹文香炉と青磁酒海壺が出土したことで注目を浴びた。陶磁器では舶載陶磁器が多く（124）、国産陶磁器（72）をしのぐ。食器の構成は境関館跡とほぼ同じである。食膳具には、青磁碗・皿・坏・盤・鉢（計53）、白磁碗・皿・坏（計53）、朝鮮皿（1）、瀬戸美濃灰釉平茶碗（1）・皿（7）・盤（4）、同天目碗（2）、漆塗りかわらけ（1）、瀬戸梅瓶（1）がある。煮炊具には吊耳鉄鍋がある。この形態では最も古いグループに入る。調理具では珠洲片口鉢（21）、不明摺鉢（1）、土師質摺鉢（4）、瀬

戸美濃鉢（1）がある。貯蔵具は、青磁壺（1）、黄褐色壺（2）、黒釉壺（2）、朝鮮壺（1）、耳付き壺（1）、珠洲壺（4）・小壺（1）、信楽（4?）、不明（2）と種類が多いことが特色である。この他、穀磨石臼（1）と茶臼が出土している。

弘前市茶毘館跡〔青森県教育委員会1988〕からは、主に14・15世紀の遺物が出土する。食膳具は、白磁皿（4）、青磁碗（9）・鉢（1）・盤（2）、瀬戸天目碗（2～3）である。調理具は、珠洲片口鉢が多く10個体以上と、産地不詳の播鉢が2片ある。ほかに瀬戸灰釉卸皿（1）・鉢（1）がある。煮炊具はないが、珠洲片口鉢にすすが付着したものがあり、火にかけて使用したものと考えられている〔大瀬1988〕。貯蔵具には珠洲甕（1?）・壺、越前甕（2）、信楽壺片（2）、産地不明甕（1）・壺（1）がある。

この他、小泊村弁天鳥遺跡、中里町中里城跡、独狐遺跡などがこの時期に該当する。

珠洲片口鉢のなかで特徴的な分布をする一群がある。吉岡がV期新としたもので、東北部各地、北海道西南部、道中部に広く分布している〔吉岡1989〕。使い込まれ、底部に穴があいたものも認められる。特殊な例では、墓から頭骨に被って出土することもある⁽⁵⁾。

[中世V期]

食膳具—白磁碗・皿、青磁碗・皿、染付碗・皿、瀬戸美濃碗・皿、木器（漆器）杯・椀

煮炊具—内耳鉄鍋・吊耳鉄鍋

調理具—越前系片口鉢、瀬戸系片口鉢

貯蔵具—越前壺・甕、黒陶壺

この時期も引き続き遺跡数、遺物量が多い。津軽半島をめぐる安藤氏と南部氏の争いが続き、15世紀前半には安藤氏が津軽を追われて北海道へ逃げる事件が起きる。十三湊は守護者を失い、近世初頭にかけて徐々に衰退していく。全国的にみても応仁の乱から戦国へと突入する頃であり、安定した日本海交易体制が崩れていったのであろう。

食器の面では、これまで北日本を市場としていた珠洲系陶器の衰退が大きな出来事である。特に流通の主体を占めていた片口鉢は、越前播鉢によって置き代わった。舶載陶磁の組成は変わり、染付が流入する。国産陶器では、瀬戸美濃製品の流入が目立つようになる。

太平洋側を代表するのが、八戸市根城〔八戸市教育委員会1979～1990〕である。昭和53年（1978）から平成元年（1988）にかけて調査が行われ、本丸の報告書が刊行されている〔八戸市教育委員会1993〕ので、それを主に述べる。根城は建武元年（1334）甲斐から入った南部師行によって築かれたといわれている。その後根城南部氏の拠点となっていたが、豊臣秀吉の東北進出に伴い、天正20年（1592）破却された。本丸の調査では、掘建柱建物跡、竪穴建物など17期におよぶ遺構の変遷がたどれる。中世II期から17世紀に及ぶ陶磁器が出土しているが、舶載陶磁器は15・16世紀、国産陶磁器は16世紀代のものが多い。

食膳具は、青磁碗（122）・皿、白磁碗（7）・皿（100）・坏（14）・瓶子（2）・水注（1）、瀬戸美濃碗（20）・皿（100）・坏（5）・鉢（12）・壺と瓶子（10）、志野皿（10）・坏（1）、鉢（1）、登窯期の皿（12）・壺か瓶子（1）、唐津碗（2）・皿（30）・盤（1）・坏（1）・鉢（1）と各時代のものがみられる。日本海側と比べて瀬戸美濃製品が多い傾向にある。

煮炊具は内耳鉄鍋が出土している。かまど状遺構も検出されている。

調理具では、珠洲片口鉢（23）、信楽播鉢（2）、越前播鉢（8）、備前播鉢（1）、唐津播鉢（1）がある。

貯蔵具は、白磁壺（1）、常滑（2）・珠洲壺（2）・甕（11）、信楽壺（2）、越前（12）となる。

同じ太平洋側では、七戸町七戸城〔七戸町教育委員会1992-95〕の北館と矢館の調査が行われ、16世紀を主体とする遺物が出土している。遺物量は少なく組み合わせはわからないが、矢館跡第4号土壌では、青磁稜花皿、白磁蓮弁文皿、染付皿（玉取獅子）がまとまって出土している。

一方、津軽方面を代表する遺跡調査が浪岡町浪岡城〔浪岡町教育委員会1978-1988〕で行われている。浪岡城は、15世紀中頃から北畠氏が居住したと伝えられ、南部氏の庇護の下に津軽半島北東部に勢力を持ったが、天正6年（1578）大浦為信により攻め落とされた。昭和52年度から発掘調査が実施されており、内館では、12世紀代の遺物が見つかったほか、大きく4期に分かれる遺構と、多量の遺物が出土している。

食膳具は、青磁碗・皿、白磁碗・皿、小坏、染付碗・皿・小坏、赤絵碗・皿、朝鮮碗・皿、瀬戸美濃灰釉碗・皿、同鉄釉碗・皿、唐津碗・皿・鉢などがある。

調理具には、珠洲片口鉢、越前播鉢、備前播鉢、唐津播鉢、瀬戸美濃灰釉鉢・卸皿などである。関連具には、石製臼と鉢がある。

貯蔵具には、珠洲甕、越前甕・壺、瀬戸美濃壺、中国褐釉壺のほか、木器として曲げ物、桶などがある。茶道具として中国製鉄釉壺、瀬戸美濃茶入れがある。

煮炊具は、内耳鉄鍋、吊耳鉄鍋が出土している。なお、径60cm、深さ23cmの穴のなかから、内耳鉄鍋が伏せられて、鎌、鋏、苧引金、轡、釘、縄などにかぶせた状態で出土した。なんらかの儀礼と関連するものと考えられる〔工藤清泰1995〕。

このような食器の組み合わせはこの時期の城館の基本となっていたと考えられる。青森県下の城館跡だけでなく、北海道上ノ国勝山館跡でもほぼ同じ組合せとなる。

この時期の播鉢は、搬入先が能登から越前へ、さらに瀬戸内の備前と九州唐津・肥前へと移っており、海運網の発展をたどれて興味深い。播鉢は船の錘として積まれる面があって、帰り船には北方の産物と置き換えられたことを想像することができる。近世の長崎交易に利用された俵物のルートと重なって来る。

[近世I期]

食膳具—染付碗・皿、瀬戸美濃碗・皿、唐津碗・皿、木器（漆器）杯・碗

煮炊具—内耳鉄鍋・吊耳鉄鍋

調理具—瀬戸系播鉢、備前系播鉢、唐津播鉢、肥前播鉢

貯蔵具—備前壺・甕、黒陶壺

16世紀末から陶磁器の搬入先が多岐に亘るようになり、組み合わせが各遺跡でかなり変化がみられるようになる。大きな特徴は、16世紀末に唐津製品、志野製品、越前製品の搬入がみられること、17世紀中頃から肥前製品が出現することなどがあげられる。舶載品では、明の染付、赤絵、清染付などがみられるが16世紀と比べると極端に量が減ることが指摘されている。

豊臣秀吉と江戸幕府による東北の再編によって、城館の廃絶と建設が行われることと関連して、

中世Ⅴ期と近世Ⅰ期の間に継続性のない遺跡がみられる。たとえば、これまで述べた、境関館跡、浪岡城跡、根城跡などは廃絶を迎えている。一方弘前市弘前城はこの時期に築かれている。十和田湖町三日市館（唐津、志野、伊万里）、横浜町牛ノ沢館跡（唐津、志野）ではこの時期の遺物が表採されている。

東通村浜通遺跡〔青森県教育委員会1984〕は、武士階層の小規模な集落と考えられている。全体で1,340片、159個体の陶磁器が出土している。明の染付が11個体だけでほかは国産陶磁器（148）となる。食膳具は、明染付碗（9）・皿（2）、瀬戸美濃灰釉皿（13）、志野皿（15）、天目碗（1）、唐津碗（14）・皿（93）・大皿（1）・向付（1）・ぐい呑（1）・盃（1）・瓶子（2）、調理具は、唐津播鉢（2）、備前播鉢（1）、不明播鉢（2）である。煮炊具は、鉄鍋片が出土している。

②……………北海道南西部

[古代後Ⅱ期] [中世Ⅰ期]（アンダーラインは搬入品）

食膳具—擦文台付坏・高坏（台付浅鉢）、土師器坏（内黒・赤焼）、須恵器坏

煮炊具—擦文深鉢、内耳土鍋、外耳土器、土師器把手付土器、鉄鍋

調理具—擦文土器甕・壺、須恵器短頸壺・長頸壺・甕

擦文文化が展開する時期である。擦文土器深鉢は、口縁部や肩部に横走る数条の沈線や鋸歯状の沈線を持つもので、道南部を中心に東北北部に広がっている。坏は低い台が付くものがほとんどで、底面にヘラ書きの刻印を持つものがある。同様のものは道央部と東北部の日本海側に分布している。道央部から東北部に分布する擦文土器が綾杉状や幾何学的文様を持つのと比べ、特徴ある一群を形成している。

ところで、道南の擦文土器がいつ終焉を迎えたかが大きな問題となっている。東北北部で11世紀中頃から土器が減少し、良好なセット関係がつかめない状態であることから、擦文土器との共存関係が明確でなくなる。また南西部からは、擦文終末頃の絶対年代を考えるための資料も出土していない。ここでは、古代後Ⅱ期と中世Ⅰ期を一括して扱い、擦文土器が継続していたと考えておく。

古代後Ⅱ期には、東北北部に独自性の強い文化が展開するのと期を一にして、特に渡島半島南西部に東北北部と同様の遺構・遺物が現れる。



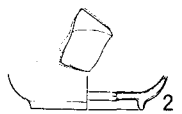

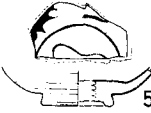
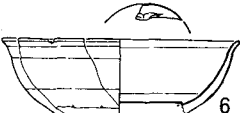


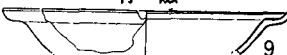
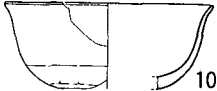


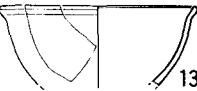



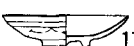








松前町札前遺跡〔松前町教育委員会1985・1989・1991〕は、日本海に臨む海岸段丘上に営まれた擦文文化の集落遺跡である。10世紀中頃に降下したと考えられている白頭山—苦小牧火山灰を掘り込んで、多様な形態の竪穴住居跡が築かれている。鍛冶遺構があるのが特色で、フイゴ羽口、鉄滓、砥石など関連遺物が出土する。また、鉄斧、鎌、刀子などの鉄製品が多く、鉄鍋の破片も出土している。このほか五所川原窯跡群産の須恵器や把手付土器など東北北部との関連を示す遺物が多い。なお、ここでは溝状遺構が検出されているが、時期および性格は明らかでない。これは松前町原口館跡〔松前町教育委員会1993〕、乙部町小茂内遺跡などで明らかになってきている、環壕集落と関連する可能性がある。

食膳具は、道南に特徴的な擦文土器の台付坏が主体で、同高坏形土器（台付浅鉢）のほか、少量の内面黒色ロクロ使用坏といわゆる「あかやき」土器坏が加わる。須恵器の食膳具はみられない。

図3 陸奥北部(1)


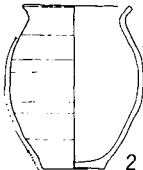


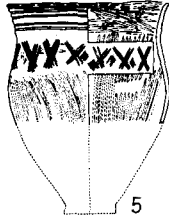
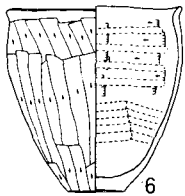
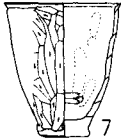
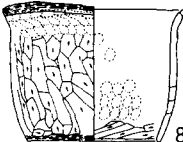
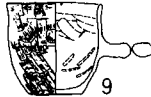
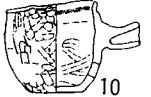

	食 膳 具	調 理 具
古代 後Ⅲ	土師器 1 2	
	1~4 古館, 5 源常平, 6~9 浪岡城内館, 10~12 境関跡, 13 尻八館 14~16 境関, 17~19 浪岡城内館, 20~26 浜通	
中 世 I	3 4	5
II	6 7	8 9 10
III	瀬戸・美濃 11 12	
IV	13 14	15 16
V	17 18	19
近 世 I	唐津 20 21 (志野) 22 23	24 25 26 0 10cm

図4 陸奥北部(2)

		食 膳 具		
古代 後 Ⅲ				
中 世 Ⅰ		1～5 中崎館跡, 6・7 境関跡, 8 浪岡城内館, 9・10 境関跡 11・12 浪岡城内館, 13～17 境関跡, 18～22 浪岡城内館 23 境関跡, 24 浪岡城内館		
Ⅱ		白磁  1	青磁  4	
Ⅲ		 2	 3  5	
Ⅳ		 6	 7  8	青磁  9
Ⅴ		 10	 11  12  13  14	 15  16
Ⅵ		 17  18	染付  19  20  21	 22 朝鮮  23  24
近 世 Ⅰ			 25	

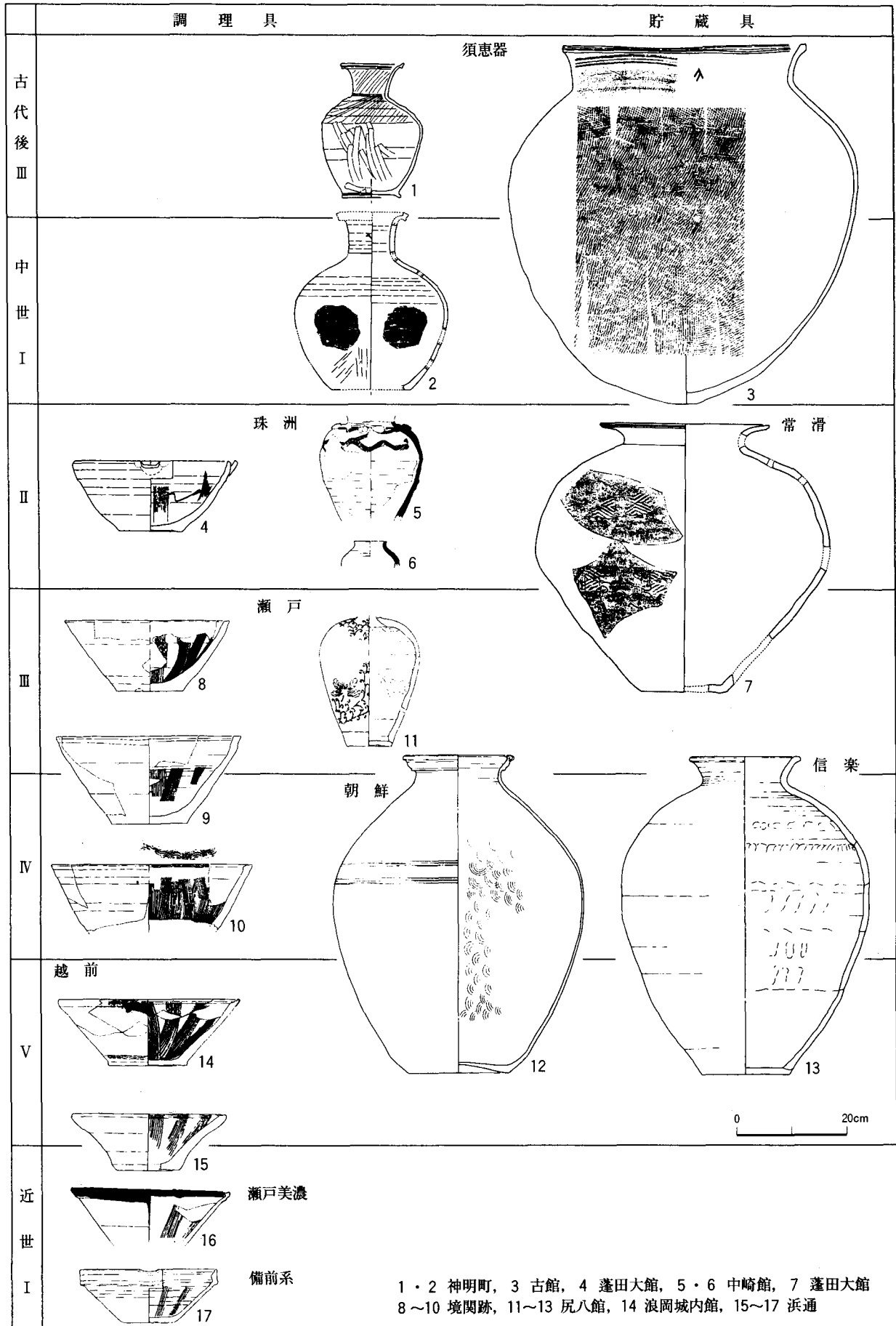
0 10cm

図5 陸奥北部(3)

		煮 炊 具					
古 代 後 Ⅲ	<p>擦文土器</p>  <p>1</p>	<p>土師器</p>  <p>2</p>	 <p>3</p>	 <p>4</p>			
中 世 Ⅰ	 <p>5</p>	 <p>6</p>	 <p>7</p>	 <p>8</p>	 <p>9</p>	 <p>10</p>	 <p>11</p>
Ⅱ	<p>1 三内丸山, 2・3 神明町, 4 源常平, 5 古館, 6~11 蓬田大館</p>						
Ⅲ							
Ⅳ							
Ⅴ							
近 世 Ⅰ							

0 20cm

図6 陸奥北部(4)



1・2 神明町, 3 古館, 4 蓬田大館, 5・6 中崎館, 7 蓬田大館
8~10 境関跡, 11~13 尻八館, 14 浪岡城内館, 15~17 浜通

煮炊具には、擦文土器深鉢（甕）がある。土師器の把手付土器もこの機能を持つものに含めておく。貯蔵具には、擦文土器壺と甕（?）、須恵器長頸壺、大甕がある。オオムギ、コムギ、コメ、アワ、キビ、モロコシの炭化栽培植物種子が検出されており、特にオオムギとコムギには調理による変形の跡がみられる。

奥尻町青苗遺跡〔奥尻町教育委員会1979・1981〕は、未報告部分があつて詳細は不明であるが、鉄生産遺構、墓、貝塚などを含む擦文文化の大遺跡である。食器の組み合わせはほぼ札前遺跡と同じである。伴出遺物は明確でないが、内耳鉄鍋が出土しており、かつて内耳土鍋が採集されていることが注目される。外耳土器は、把手付土器の変形と考え、煮炊具としておく。貝塚からは魚介類、クジラ、アシカなどの海獣、シカなどの動物遺体に混じって各種の骨角製銚がみられ、海の幸に頼った生活を思わせる。

この他瀬棚町南川2遺跡〔瀬棚町教育委員会1985〕、森町御幸町遺跡〔森町教育委員会1985・1994〕などの遺跡がある。

[中世II期]

貯蔵具—珠洲壺・甕

東北北部で土着の土器がほとんど造られなくなり、移入品のセットが一部で確立する時期である。これらのセットに土師器の長甕が共伴していないことは確実であり、中世II期に引き続いて、土器製煮炊具から鉄製鍋への大きな変化が起きていることが指摘できる。

南西部では、この時期から便宜的に「前期アイヌ文化」と呼んでおくが、その様相はまったくわからない。この時期の始めか12世紀末までに南西部で擦文土器が終焉を迎え、食膳具と貯蔵具は木器や漆器に、煮炊具は鉄鍋（一部土鍋の可能性があり）に移り変わったと思われる。

本州からの移入品で、年代がわかる遺物が出土したのは3例にすぎない。すべて珠洲焼で、上ノ国町竹内屋敷遺跡では擦文時代の竪穴住居跡の上層から、I₃期の壺片が出土している。また、同町洲崎館跡ではI₂期の四耳壺片が採集されている。道央部との境となる余市町大川遺跡では、I₃期の甕片が出土している（年代は吉岡1995による）。

これらの遺物は今のところ単独出土であり、東北北部のように土師器坏（かわらけ）などとセット関係を持っていない。東北北部の中崎館跡の集団とは異なった性格をもつもので、奥州藤原氏の解体に伴う小集団の北海道への移住、罪人の北海道流島などと関連するものかもしれない。

いずれも珠洲焼であることは、北部日本海交易圏に北海道南部が組み入れられていることを示そう。しかし古代における須恵器の流通圏と比べ、明らかに小範囲となっている。奥州藤原氏の津軽までの勢力伸長と滅亡、一方で鎌倉幕府の成立と得宗領の成立など大きな変動があったために、津軽における集団の再編がおこなわれたためであろうか。それとともに、中世になると国家の境域は外が浜までで、蝦夷ヶ島（北海道）は領域外とされることが大きな意味を持つと考えられる。これまで、津軽蝦夷が独自に展開していた交易が、形の上でも幕府の管轄下におかれることになる。蝦夷沙汰や後に安東太に与えられたという蝦夷管令（『諏訪大明神画詞』）などが、交易の管理者をも含めた意味をもっていたのではなかろうか。いわゆる自由な交易がしにくくなったわけで、これが蝦夷ヶ島との交易がやや停滞した観を呈することになった原因と考えている。

このような状況が、逆に北海道アイヌ側からの積極的な交易活動を生み出すこととなり、同時に

アイヌ社会としてのまとまりを生み出す大きな結果を生んだのではなからうか。

[中世 III 期]

食膳具—白磁碗・皿，青磁碗・皿

調理具—珠洲系片口鉢

貯蔵具—珠洲壺・甕，越前壺・甕

前期アイヌ文化の様相については、まったくわからない。文献では、鎌倉末期の安藤氏の乱に、アイヌの風俗をしたものが参加してきたことが描かれている。

わずかにこの時期の陶磁器が出土する遺跡があるが、遺物量はわずかでセットをなしていない。そのほとんどが珠洲系の製品であり、中国産の青磁鎗蓮弁文碗と口禿白磁碗が加わる。函館市志苔館跡や余市町大川遺跡では中世 IV 期の製品に混じって出土する。この他、瀬棚町利別川口遺跡の珠洲片口鉢 (III 期)、江差漁港遺跡の珠洲片口鉢 (III 期)、函館市志海苔蓄銭遺構の古銭を埋納した越前甕と珠洲甕、函館市七重浜出土の珠洲系壺 (IV₂ 期) などがあげられる。

13世紀後半から14世紀初頭にかけて、元が黒龍江流域に進出して樺太の「骨唄」と戦ったことが『元史』にみられる。「骨唄」は、後の「苦夷」つまり樺太アイヌに比定することができ、長期にわたる戦闘の記録が残ることから、かなり強固な集団を形成していたと推定されている〔中村1992〕〔榎森1990・1995〕。樺太アイヌの人々が形成されはじめたのは、オホーツク文化と擦文文化が融合しているから、大陸からの交易品を得ることを目的に進出をはじめた擦文文化後期頃からと思われる。擦文土器と共伴する宋銭は穴が加工されていることからみて、装飾品の一つとして用いられたもので、このルートをとどって運ばれたものであろう。なお、骨唄が吉里迷（ギリヤーク）を圧迫したことが元との対立のきっかけになっていることから、13世紀中頃から本格的に北海道から樺太への進出が行われたと考えられる。骨唄は結果的に元に服属する形で、毛皮の貢納を行うようになるが、逆にみれば大陸との窓口が開けたととることができよう。このような北方との交易は、常時行われたいたと考えられ、中国の勢力が拡大するときより大きな流れとなるようである。

このような大陸からの圧力、北方諸民族との抗争もアイヌ民族としてのまとまりを高めるものとなったといえよう。

[中世 IV 期]

食膳具—白磁碗・皿・坏，青磁碗・皿，土師器皿（かわらけ），木器（漆器）杯・碗

煮炊具—内耳鉄鍋・吊耳鉄鍋

調理具—珠洲系片口鉢，瀬戸美濃三足鉢

貯蔵具—珠洲壺・甕，越前壺・甕，信楽壺，黒陶壺，朝鮮壺

木器・漆器—曲げ物，桶，折敷，箸

この時期から急に陶磁器が出土する遺跡数が増え、遺物量が多くなる。東北部津軽半島を中心にした安藤氏の体制が確立し、海上交易の拠点となった十三湊が繁栄したと大きく関連するのであろう。南西部に定着していく和人集団の姿を、これらの陶磁器から垣間見ることができる。

函館市志苔館跡〔函館市教育委員会1986〕は、15世紀前半代を中心にした遺物のセットを出土する遺跡である。いわゆる「道南十二館」とよばれるうちの一つで、『新羅之記録』によれば小林氏が館主であり、長禄元年（1457）狄から攻撃を受けたことが記されている。いわゆるコシャマイン

の戦いである。また永正九年（1512）にも夷賊に攻め落とされたとされる。発掘調査により、壕と土塁に囲まれた郭内から、大きく III 期にわけられる掘立柱建物跡、井戸などが検出されている。食膳具には白磁碗（1）・皿（12）・多角小坏（11）、青磁碗（20）・皿（5）・盤（1）、天目碗（1）、土師器ロクロ使用坏（京都系（5））がある。煮炊具には内耳鉄鍋、吊耳鉄鍋、同把手付鍋、調理具には珠洲片口鉢（6）、越前片口鉢（1）、瀬戸美濃三足鉢（6）、貯蔵具には珠洲甕（4）、越前甕（1）、信楽壺（1）、黄褐釉壺（1）がある。このほか曲げ物、桶、箸などの木製品がある。なお SB-1 掘立柱建物跡に付属する形で SX-1 カマド様遺構がみられる。長軸2.6m、短軸1.6m、深さ0.3～0.5mほどの不整形の竪穴状で、壁の一部と底面が焼けている。覆土に自然石が入っている。

余市町大川遺跡〔余市町教育委員会1995〕は、余市川の河口付近に営まれた中世和人の交易拠点と考えられている。溝と柵列で区切られた地割りの中に、建物が並んでいたようである。ここからは、志苔館跡とほぼ同じ組合せの遺物群が見つかるが、量的にはそれをしのぐ。食膳具には、青磁碗・皿、白磁碗・皿・小坏、瀬戸平碗・天目碗・小皿・平鉢・三足盤・小鉢、煮炊具には、鉄鍋、調理具には珠洲片口鉢、瀬戸卸皿がある。特に珠洲片口鉢が81個体も出土していることが注目される。貯蔵具には、珠洲壺、小壺、信楽壺があるが量は少ない。

この遺跡では、アイヌ文化の墓も検出されており、集落も近くにあったことが想像できる。ただ、吉岡が指摘するように、焼土と炭化物の存在から遺跡が焼けたとすれば、和人集団が去った後に墓が営まれたと考えるのが妥当であろう。

この時期の和人集団の足跡を示す遺跡・遺物として、次のようなものがあげられる。館跡には、上ノ国町花沢館跡、上磯町茂別館跡、戸井町戸井館跡がある。知内町涌元遺跡の珠洲片口鉢を頭に被せた墓は、下北半島の例と共通する。また木古内町札刈遺跡の宋銭のみを副葬した墓は、六道銭の風習を取り入れたものであろうか。さらに瀬棚町利別川口遺跡の火葬墓、戸井町と函館市から出土した板碑などは、仏教の流入を示すものと言えよう。この他、主に青磁碗と珠洲片口鉢が各地に分布している。神恵内町観音洞窟遺跡、寿都町朱太川右岸遺跡、乙部町元和8遺跡、松前町茂草B遺跡、森町森川遺跡などである。これらは主として船着場に適した場所にあり、和人集団の残した村落遺跡や寄港地と考えられよう。

ところで、志苔館跡や大川遺跡から出土する遺物の組合せは、東北部の境関館跡、茶毘館跡などの組合せとほとんど変わらないことから、これらの陶磁器の流入先が同じであったと推測できる。例えば、十三湊で荷揚げされた陶磁器が、そこで各器種の組合せが成され、それが各地に持ち込まれる様な形の流通形態があったのではなかろうか。

この時期のアイヌ文化の様相は、やはりほとんどわかっていない。文献では、『諏訪大明神絵詞』の記載がよく知られている。また長禄元年（1457）のコシャマインの戦い以降、各地のアイヌ集団についての記載が現われるが、考古学的にその実態はほとんどわからない。森町森川遺跡や観音洞窟などの珠洲片口鉢を残す遺跡も、アイヌ文化のにない手が残した可能性があるが、遺物の組み合わせがほとんどなく、その集団の実態が明らかにできない現状である。

この時期、南西部のアイヌ文化のにない手であった人々は、本州の物質文化（特に陶磁器）を手に入れようとするならば可能であったはずである。もし陶磁器が必要であったなら、もっと多量の遺物

が広い地区から、セットをなして出土していいはずである。ところが、その必要性をアイヌ文化の人々が持たなかったことと、本州の交易者達が持ちこまなかったことが重要なのであろう。残存数は少ないが、鉄鍋は煮炊具として確実に流入しているのであり、何を選択して移入しているのかを知る事が課題である。

もう一つこれと関連して、遺物を残した集団の性格を明らかにしておく作業も重要である。和人集団が流入していたことは、擦文文化以前からの東北部との強い結びつきを考えれば、各時期に十分ありうることであった。しかし考古学的にそれをどのように認定していくかとなると、「遺跡のになてはだれか？」という大きな問題につきあたる。とりあえず、陶磁器を残す遺跡について、和人が流入した可能性を考えておくが、当然「アイヌ社会の中に陶磁器は入らなかったのか？」という疑問が残ることになる。

[中世 V 期]

和人が道南部に和人地を形成していく時期である。南西部から道央部にかけて数多くの遺跡があり、出土遺物も多い。この時期の特色として、国産では珠洲が次第にみられなくなり、越前の製品（これも片口鉢が多い）が流入することである。輸入陶磁器では、染付磁器がみられるようになる。

余市町大浜中遺跡〔松下亘1984〕〔吉岡1995〕は、余市町の海岸部に伸びる砂丘上に形成された遺跡で標高4mほどである。登川の改修工事の際、昭和27年に陶磁器、漆器、鉄鍋、古銭（永楽通寶を含む）、刀、鐔などが出土したとされるが、正式な記録はなく、一時散逸したものが再び集められている。現存している陶磁器は、青磁碗（4）・皿（5）、美濃天目碗（1）である。15世紀後半に一括して埋納された可能性があり、生活の場とは考えにくい。

上之国勝山館〔上ノ国町教育委員会1980～1994〕は、この時期の代表的な遺跡である。この館はコシャミンとの戦いを制圧した武田信広が、15世紀代後半に居城として築き、16世紀前半に拠点を松前の大館に移すまで営まれたとされている。発掘調査の結果、15世紀末から16世紀末にかけての大量の遺物が出土している。食器についてまとめると次のようになる。

食膳具—白磁碗・皿、青磁碗・皿、染付碗・皿、瀬戸美濃碗・皿、土師器皿（かわらけ）

煮炊具—内耳鉄鍋・吊耳鉄鍋・片口鉄鍋

調理具—珠洲系片口鉢、越前片口鉢、瀬戸播鉢

貯蔵具—越前壺・甕、黒陶壺

関連具—石臼・茶臼

木器・漆器—杯・椀・皿、曲げ物、桶の蓋、折敷

勝山館に拠った武田氏は、16世紀のはじめに拠点を松前町大館に移し、和人勢力を統合するとともにアイヌとの戦いに勝ち、16世紀半ばには道南における統一者としての地位を確立していく。この時期の遺跡としては、上ノ国町比石館跡、洲崎館跡、上磯町矢不來館跡などの城館遺構のほかに、上ノ国町内の集落跡が調査され始めている。同時に道南各地の村落も安定していくようである。上磯町矢不來天満宮などの神社跡も村落と結びついて残されたのであろう。墓では、松前町上川墳墓群〔久保泰1979〕、松前福山城内と福島町穂内館跡の木槨を持つ屈葬（座葬）墓、函館市弥生町の越前片口鉢を頭に被った人骨、寿都町朱太川右岸遺跡の鏡を副葬した屈葬人骨、道央部になるが千歳市末広遺跡の同じく鏡を副葬した屈葬（座葬）などが和人のものと考えられる。この時期から、近

世Ⅰ期へと続く福山館跡，上ノ国漁港遺跡，矢不來天満宮跡，瀬棚町瀬田内チャシ跡などの遺跡があることが，南西部の和人勢力の安定を物語っているといえよう。

この時期から近世Ⅰ期にかけて，アイヌ文化の姿がようやく少し明らかになって来る。特に勝山館跡から出土した数多くの骨角器は，アイヌと和人との関係について大きな問題を投げかけている。館の一角にアイヌの人々が居住し，漁撈活動や海獣猟を行っていた可能性を否定できず，アイヌ勢力を内部に組み入れた形での館主の存在が考えられる。館の内部にある鍛冶遺構や銅鑄造遺構は，郭内での生活用品だけでなく，アイヌとの交易品を製作した可能性もあろう。当時の館や館主の性格とともに考えていかなければならない問題である。

これまでアイヌ文化の遺構と遺物はほとんど残っていなかったが，16世紀頃から墓や生活用具がわずかながら明らかになって来る。これらは，文献にみられる「近世アイヌ文化」につながる要素をもっている。この時期を「後期アイヌ文化」の開始時期としてとらえてみたい。住居跡の例はまだないが，墓が数例検出されている。木古内町札刈遺跡，南川2遺跡，大川遺跡の墳墓にはこの時期に属するものが含まれる。長方形またはやや台形を呈する墓壇をもち，埋葬形態は伸展葬である。副葬品には，折敷，椀，皿などの漆器類，刀，小刀（マキリ），装飾品としてのガラス玉・古銭・銅板などがある。

[近世Ⅰ期]

食膳具—明染付碗・皿，赤絵，瀬戸美濃碗・皿，唐津碗・皿，鉢，伊万里碗・皿

煮炊具—吊耳鉄鍋・片口鉄鍋

調理具—瀬戸美濃系摺鉢，備前系摺鉢，肥前系摺鉢，唐津系摺鉢

貯蔵具—瀬戸小壺，備前壺・甕，黒陶壺

木器・漆器—杯・椀

この時期も中世Ⅴ期に引き続き，遺跡数が多く遺物量もある。松前藩の支配が確立し，蝦夷地交易の権限が集約される。道内各地に知行地ができ，物資の流通も盛んになる。この時期の遺跡は，近世Ⅱ期以降に引き継がれることが多い。

上ノ国漁港遺跡〔上ノ国町1987〕では，中世Ⅴ期末頃から近世・近代にいたる，陶磁器，銅製品，鉄製品，古銭，瓦などが海底に集積している。これらの遺物は，海岸部に集落を形成し，居住して来た人たちの長年の生活廃棄物が，自然の営為によって集積し形成されたと考えられている。陶磁器からみると，中世Ⅳ期に遡るものを含むものの，16世紀末からが主体となっている。

16世紀末の機種構成は，志野皿，美濃天目茶碗各1のほか，唐津甕・水差・瓶，唐津及び肥前系摺鉢，瀬戸美濃系摺鉢，備前系摺鉢である。中国製陶磁器はみられない。17世紀代になると肥前染付碗・皿，唐津皿・鉢，肥前系摺鉢，瀬戸美濃系摺鉢，備前系摺鉢などからなる。唐津製品が多いこと，瀬戸美濃系摺鉢が目につくことが特色としてあげられる。

瀬棚町瀬田内チャシ跡〔瀬棚町1980〕は，日本海に注ぐ後志利別川の右岸砂丘上に位置する。瀬田内はハシタイン，タナカサシなどの拠点として文献に名を記されているところであり，寛文10年（1670）には，シャクシャインの戦い（1669）に関連して蝦夷地を見聞した津軽藩士の記録である『津軽一統志』巻第十に，「大将彦次郎居城あり」との記録がある。おそらくチャシが築かれていたのであろう。昭和40年から43年にかけての千代肇による調査では，空堀，土塁，貝塚，住居跡など

が認められ、チャシ跡の存在を指摘している〔千代1967〕。昭和53・54年度の調査では、チャシ跡関連の遺構は確認できず、斜面を削って構築した半地下式の掘立柱建物群、貝塚、墓などが検出された。遺構と遺物は、1640年に降下した駒ヶ岳d火山灰の上下から出土している。遺物は2,600点を越す陶磁器、鉄鍋20個体以上、各種金属製品、鈷・中柄などの骨角製品、ガラス玉、煙管などがある。陶磁器は、15世紀にさかのぼる青磁鉢を除くと、16世紀末から近現代にまでおよぶ。16・17世紀のものには、明染付皿、赤絵碗、瀬戸美濃皿・鉢・小壺、唐津皿・碗・鉢、肥前系播鉢などがある。これらの遺物群や遺構をみると、チャシ跡が存在していたことは否定できないが、その後は和人が使用したと考えた方が適切であろう。運上屋があった時期もあり、骨角器などアイヌ文化の製品があることから、和人ととの接点となった地域と考えることができよう。

この他福山館からこの時期の遺物が出土している。

この時期の特徴として、唐津、伊万里の流入があげられる。広く日本海を南北に結ぶ航路の成立を背景にしたものである。

アイヌ文化の遺跡には、次のようなものがある。南川第2遺跡と大川遺跡の一部、南茅部町白尻B遺跡、駒ヶ岳d火山灰直下（1640年降下）で検出された森町御幸町遺跡の3基の墓などである。刀、山刀、刀子などの鉄製品、漆器盆・碗などが副葬されている。キセルが副葬される墓は、この時期以降とすることができる。

③……………北海道道央部

[古代後Ⅱ期] [中世Ⅰ期] [中世Ⅱ期]

食膳具—擦文坏・台付坏・高坏

煮炊具—擦文深鉢

貯蔵具—擦文甕、須恵器短頸壺・長頸壺・甕

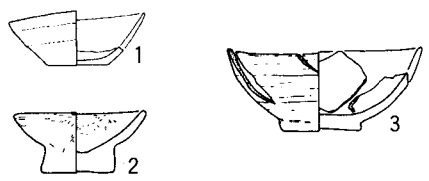
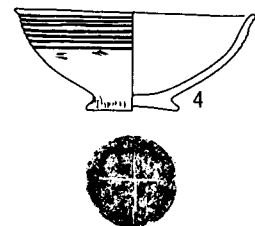
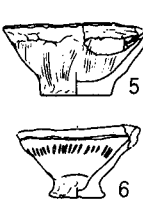
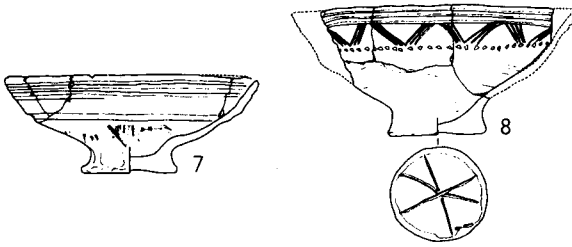
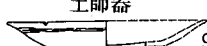
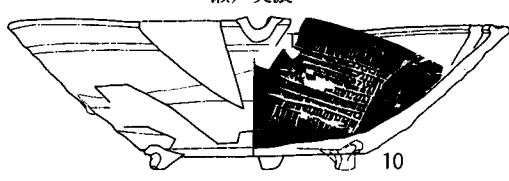
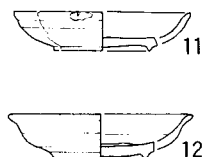
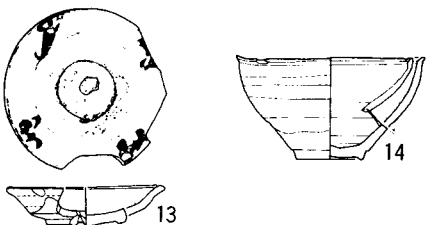
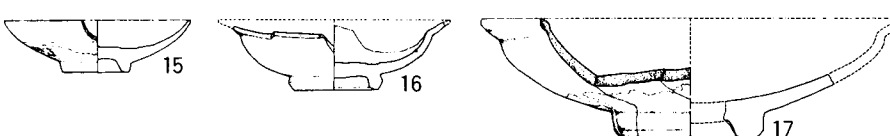
擦文土器が使用された時期を一括して述べる。古代後Ⅱ期には、道央部にも東北部の影響が及んでくる。鍛冶遺構の出現、前田野目産須恵器の流入、コメ・アワ・ヒエなどの栽培植物種子の出土などに具体的に現れる。同様の現象は東北部にまで及んでいく。

千歳市末広遺跡〔千歳市教育委員会1981・82・85〕では、白頭山—苫小牧火山灰を挟んだ上下から遺構と遺物が検出されている。10世紀中頃とされる火山灰降下の頃に、擦文土器深鉢は、胴部上半に平行な沈線を巡らしたものから、平行沈線の上に縦の篋書きの文様を描く、いわゆる「刻文土器」までである。坏は、ロクロ使用の内黒坏から低い台の付いたものへ変化するとともに、いわゆる赤焼土器がみられるようになる。また、前田野目産須恵器の坏・長頸壺・壺・大甕などが相伴してくる。

恵庭市オサツ2遺跡〔北海道埋蔵文化財センター1995〕でも、同じ火山灰を挟んで上下から遺物が出土しており、同様な変化を見ることができる。

留萌市小平遺跡〔留萌市教育委員会1983〕は、日本海に注ぐ小平蕊川の右岸河口付近に営まれた、擦文の大集落である。200軒近い住居跡は、古代後Ⅱ期から中世Ⅰ期にかけてのものと考えられる。擦文深鉢は、横走沈線上に文様を描くものから、横走沈線が消えて上書きの文様だけになるもの、文様帯が多段になるものへと変化していく。坏は、台が付くものが一般的で、多段の文様帯の時期

図7 北海道・南西部(1)

	食 膳 具	調 理 具
古代後Ⅲ		
中世Ⅰ		
Ⅱ	<p>1～4 札前, 5～8 青苗, 9・10 志苔館跡, 11～14 勝山館 15～17 瀬田内チャシ跡</p>	
Ⅲ		
Ⅳ	<p>土師器</p> 	<p>瀬戸美濃</p> 
Ⅴ		
近世Ⅰ	<p>唐 津</p> 	

0 10cm

図8 北海道・西南部(2)

		食 膳 具	
古 代 後 Ⅲ	1・2 大川, 3~9 志蒼館跡, 10~14 勝山館跡		
中 世 Ⅰ			
Ⅱ			
Ⅲ	白 磁	青 磁	
Ⅳ			
Ⅴ			
	染付 		
近 世 Ⅰ			

図9 北海道・南西部(3)

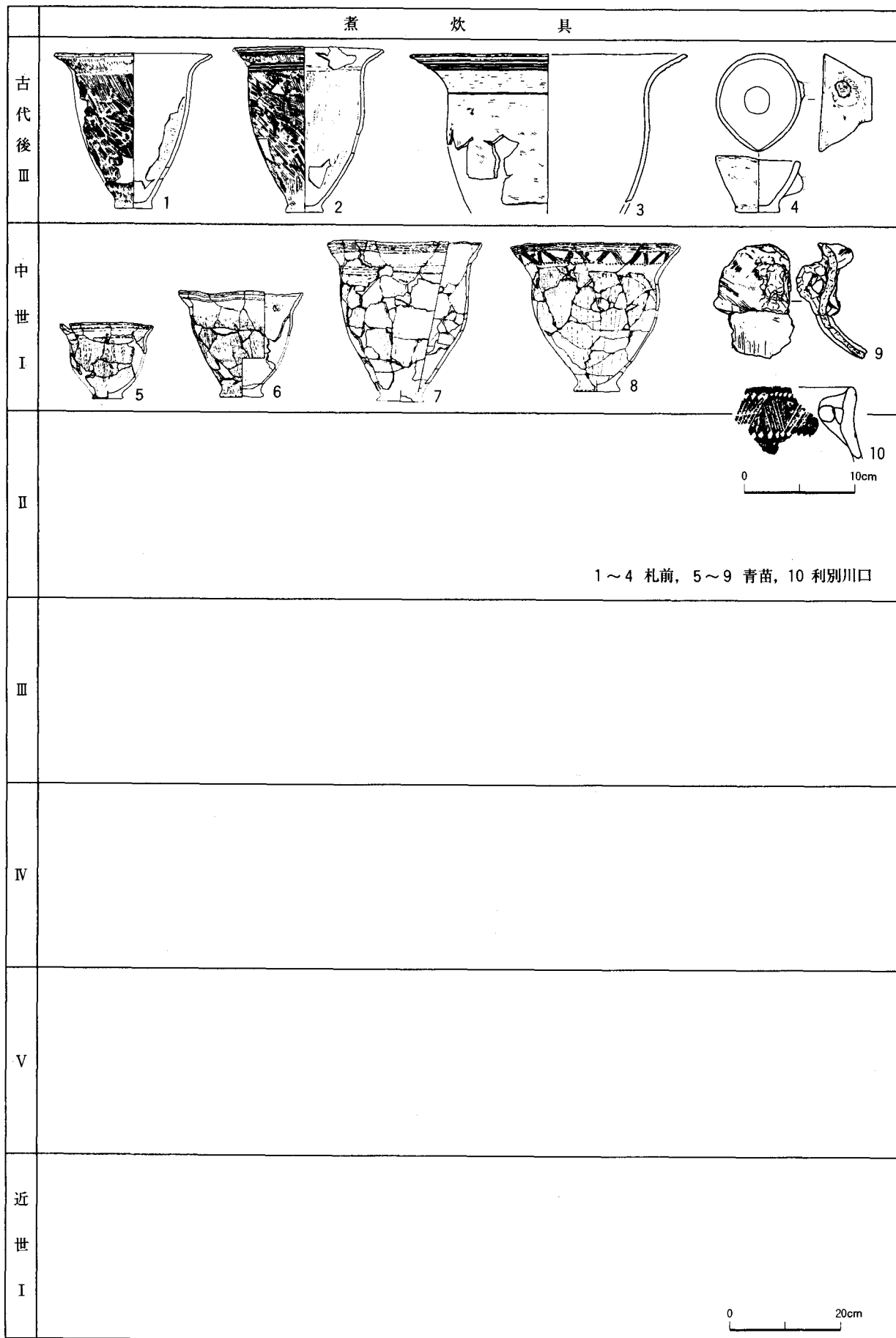


図10 北海道・南西部(4)

	調理具	貯蔵具
古代後Ⅲ	土師器 1	須恵器 3
中世Ⅰ	2	
Ⅱ	珠洲 4	5 6
Ⅲ	7	8
Ⅳ	9	越前 12
Ⅴ	越前 10 11	
近世Ⅰ	備前系 13 14 15	16 17

1 南川 2, 2・3 札前, 4 洲崎館, 5 竹内屋敷, 6・7 大川
8 七重浜, 9・10 志苔館跡, 11 利別川口, 12~17 上ノ国漁港

0 20cm

には高坏へと変化する。

石狩低地帯には、多段の文様帯の時期以降、土器はみられるが遺構はほとんどみられなくなる。

道南との土器の対比は、白頭山-苦小牧火山灰が鍵層になる。深鉢では、南西部の沈線だけの文様は、道央部にはほとんど見られない。逆に刻文土器は道南や東北部では数少ない。このように深鉢の文様に地域色があり、年代差が見られるのに対し、坏は土師器や須恵器で搬入品が多く、それを模したものが製作されていた。台付坏が北海道独自のもので、日本海側を中心に、石狩低地帯、上川盆地などに広がっている。台部の底面に、様々な記号が付けられたものが多く見られ、この地域の共通性を示している。次の段階で高坏になると、東北部が主体となる。

白頭山-苦小牧火山灰が降下した頃から、前田野目産須恵器の坏・長頸壺・短頸壺・大甕などが出土するようになる。多段の時期になると、共伴関係がはっきりしなくなる。

[中世 III 期]

南西部との境界に当たる大川遺跡で、わずかではあるが遺物が確認できる以外、この時期の遺構・遺物ははっきりしない。

この時期、樺太アイヌと元朝や北方諸民族との間で摩擦があったことは、前に触れた。

[中世 IV 期]

食膳具—青磁碗 煮炊具—内耳鉄鍋・吊耳鉄鍋 調理具—珠洲片口鉢

南西部で和人が定着し、余市町大川遺跡にまでその一部が進出してきているようである。前述のように松前から点々と珠洲片口鉢や青磁が出土する遺跡があり、道央部へと続いている。千歳市末広遺跡、同市美々8遺跡では珠洲片口鉢（V新）が出土している。この2遺跡は、日本海側と太平洋側を結ぶ「シコツ越え」のルート上にあり、日本海側から、物資がこの道を通って、太平洋側に運ばれていたことを示す証拠となろう。ちなみに太平洋側では、伊達市ポシマ遺跡で青磁碗が、室蘭市絵鞆遺跡で珠洲片口鉢が出土していて、南西部と連なっている。これらの遺物が和人によりもたらされたとすれば、その分布範囲は、『新羅之記録』にある「鵠川余市の間」と一致する。和人がコシャマインの戦い以降引き続いて起こったアイヌとの戦闘のなかで、南西部の一部へと撤退したことと、これ以降陶磁器の分布が道央部に広がるのは、16世紀中頃になってからであることと符合する。

[中世 V 期]

食膳具—染付碗・皿，瀬戸美濃碗・皿 煮炊具—内耳鉄鍋・吊耳鉄鍋
調理具—越前片口鉢 貯蔵具—小壺

[近世 I 期]

食膳具—染付碗・皿，瀬戸美濃碗・皿，唐津碗・皿，木器（漆器）杯・椀
煮炊具—内耳鉄鍋
調理具—瀬戸系播鉢，備前系播鉢，唐津系播鉢
貯蔵具—備前壺・甕，黒陶壺

16世紀後半頃から、道央部各地でこの時期の陶磁器がみられるようになる。石狩低地帯や太平洋岸では、17世紀から18世紀前半に降下した火山灰に覆われて検出されること、中世 V 期と近世 I 期の遺物がほぼ一体となって出土することから、まとめた記述を行いたい。

16・17世紀代の陶磁器は、日本海側では余市町までで、それから北は不明である。内陸部では、千歳市釜加遺跡、ユカンボシ2遺跡、末広遺跡、美々8遺跡、苫小牧市静川22遺跡と「シコツ越え」に沿うように分布している。太平洋側では、噴火湾沿岸の虻田町入江貝塚、伊達市有珠7遺跡、有珠善光寺遺跡と、沙流川流域の平取町ユオイチャシ跡、ポロモイチャシ跡、二風谷遺跡、イルエカシ遺跡に集中している。

これらの遺跡からは、アイヌ文化の掘立柱建物跡や墓、チャシ跡が検出されている場合が多い。ようやくアイヌ文化の実態が明確になりつつある時期である。

千歳市末広遺跡〔千歳市教育委員会1981・82〕では、樽前a降下軽石層（Ta-a 1739年降下）に覆われた黒色土層（IB）から、掘立柱建物跡、墓などの遺構と、明染付皿、瀬戸美濃灰釉皿、播鉢などが出土している。アイヌ墓と考えられる伸展葬の墓とともに、IP-62墓やIP-90墓のように屈葬形態を取るものがある。IP-90墓からは和鏡と北宋銭3枚が出土した。朱太川右岸遺跡出土の鏡を副葬した墓とともに、和人の墓と考えたい。陶磁器もこれらの人々が残したもので、アイヌの人々と同一村内で生活を営んでいた可能性もある。

平取町イルエカシ遺跡〔平取町遺跡調査会1989〕は、沙流川流域に営まれた数多くのチャシ跡と集落遺跡の一つである。シラッセチャシ跡とボンカンカンチャシ跡に挟まれたこの遺跡からは、樽前b火山灰（Ta-b 1667年降下）に覆われて、掘立柱建物跡、鍛冶炉、墓などが検出された。遺物には、鉄鍋、刀子、煙管、釘などの金属製品、ガラス玉、土玉、石器などがある。これらと共に5個体分の陶磁器が出土した。肥前陶磁碗・皿、唐津碗・播鉢、備前系播鉢である。沙流川流域の遺跡からは16世紀末から17世紀代の陶磁器が出土しており、各遺跡に流入していた様相がうかがえる。この時期になると和人がかなり日高方面へも入り込んで、陶磁器を手に入れる機会がかなり増えていたと思われる。これらの陶磁器が、アイヌ文化のなかに、威信財として取り入れられ祭礼などの折に使用されていたのではなからうか。特に播鉢は使用痕が残り、底部に穴があいているものまであって、重要視された可能性がある。もし実用品として組み入れられていたものであれば、もう少し量があってもよいのではなからうか。

④……………北海道北東部

北海道東北部は、調査遺跡の少なさもあって出土遺物が少なく、まだ実態の明らかでない時期も多い。この地域はアイヌ文化形成の上で、大きな役割を持つ地域と考えられる。南西部と比べ和人力の進出は遅れ、中世末期から近世になって本格化する。本州ばかりでなく樺太や千島を通して大陸とのつながりを考えていかねばならない地域である。

[古代後Ⅱ期] [中世Ⅰ期] [中世Ⅱ期]

食膳具—擦文台付坏・坏

煮炊具—擦文深鉢、内耳土鍋

貯蔵具—擦文甕、須恵器短頸壺・長頸壺・大甕

擦文土器とともに、オホーツク土器との融合形式であるトビニタイ式土器が展開する。供膳具としては、擦文土器の台付坏から高坏への変遷がみられる。オホーツク土器とトビニタイ式土器には供膳具がみられず、擦文高坏が伴う例がある。煮炊具はいずれも深鉢（甕）である。中世Ⅱ期に

図11 北海道・道央部(1)



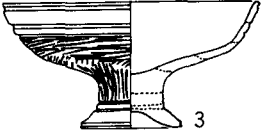
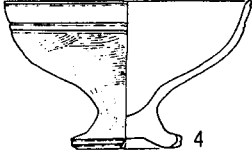
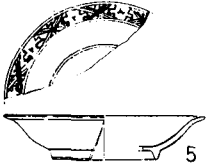

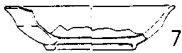


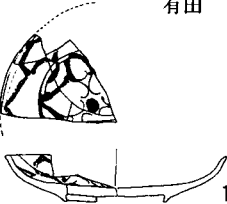
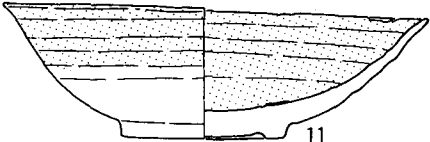
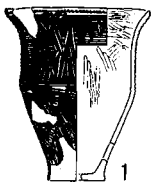
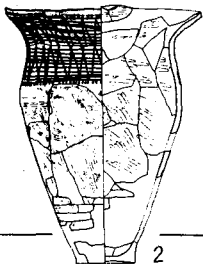
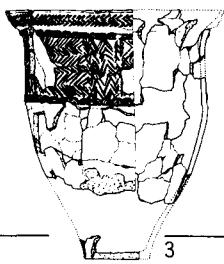
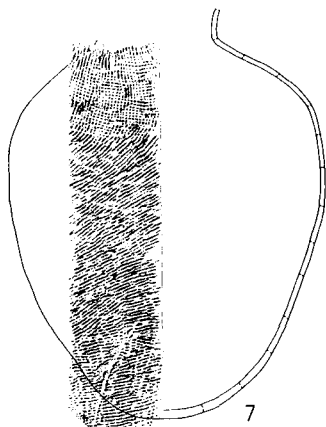
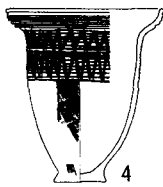
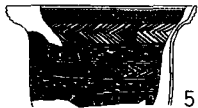
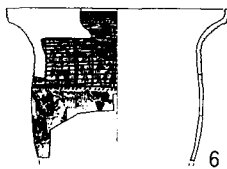
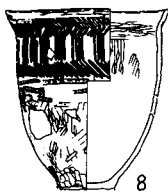


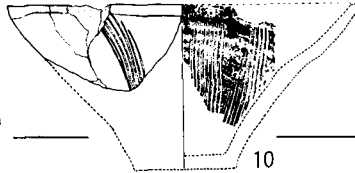


		食 膳 具				
古 代 後 Ⅲ						
中 世 Ⅰ						
Ⅱ		<p>1～4 小平高砂, 5 末広, 6 美々8, 7 末広, 8 有珠7, 9 二風谷 10 イルエカシ, 11 ポロモイチャシ跡</p>				
Ⅲ						
Ⅳ						
V			染 付		瀬戸美濃	
						
近 世 Ⅰ	赤 絵		有 田		唐 津	
						
						
				<p>0 10cm</p>		

図12 北海道・道央部(2)

	煮 炊 具	調 理 具	貯 蔵 具	
古 代 後 Ⅲ				
中 世 Ⅰ				
Ⅱ				
Ⅲ	<p>1 美々8, 2 末広, 3 有珠7, 4~7 小平高砂, 8 美々8, 9 美々8 10 末広, 11 釜加, 12・13 イルエカシ</p>			
Ⅳ			<p>珠 洲</p>  <p>9</p>	
Ⅴ		<p>備前系</p>  <p>11</p>	<p>瀬戸美濃</p>  <p>10</p>	
近 世 Ⅰ		<p>唐津</p>  <p>12</p>	<p>備前系</p>  <p>13</p> <p>0 20cm</p>	

は、西月が岡遺跡で内耳土鍋が出現している。函館市立博物館には、捺文土器と同じ文様の付いた内耳土鍋がある。貯蔵具は、古代後Ⅱ期に東北北部から流入した須恵器の短頸壺、長頸壺、大甕がある。

古代後Ⅱ期には、東北北部から須恵器と共に鉄製品と鍛冶技術が流入している。また、オホーツク文化からの鍛冶技術も伝わっていたかもしれない。

中世Ⅱ期に、捺文土器が終焉を迎えたと考えている。捺文土器の終焉時期について多くの説があるが、絶対年代を示す根拠をあげるにとどめ、別稿に譲りたい⁽⁶⁾。

[中世Ⅲ期] [中世Ⅳ期]

煮炊具—内耳土鍋，内耳鉄鍋？

この時期大陸では明に代わって明が建国され、永楽帝の時代に東北地方まで進出する。永楽7年(1409)には、黒龍江最下流域に奴兒干都司を設け地方支配の拠点とした。明の支配は樺太にも及び、3か所に衛所がおかれた。各地の民族は、明へ貢献し、毛皮などを貢納する代わりに下賜品を得る形が取られた。実質的には交易であり、このほかに私交易も行われたようである。大陸からの物資の流通が盛んとなり、中国や朝鮮の貴族層に貂皮の使用が流行するようになってからは、「貂皮交易」と呼ばれる状況を呈する。毛皮の見返りとして鉄鍋や、農具なども流入していたようである。

樺太に流入したものは、さらにアイヌの人々によって北海道へもたらされていた。文献にみられる「銅雀台の硯」はこのルートで運ばれたものであろう。この他、常呂町のライトコロ川口遺跡の捺文住居廃棄後に築かれた墓から出土した、コイル状鉄製品、ガラス玉なども同様である。コイル状鉄製品の類例は、羅臼町植別遺跡、平取町二風谷遺跡、余市町大川遺跡から出土している。ガラス玉は、大川遺跡、瀬棚町南川2遺跡、上ノ国勝山館跡などから出土している。ガラス玉は、この後アイヌの人々だけでなく、和人にも貴重視され、銭に代わるような使い方をされる交易品となっていく。このルートの交易は、近世には「山丹交易」と呼ばれ、幕末まで続いた。

樺太南部から、北海道東北部、千島、カムチャッカ南部にかけて、内耳土鍋が広がっている。形態は捺文文化と比べて大型化し、口縁部にくびれを持ったり、吊耳部をまねているものがある。おそらくその成立は本州と樺太からの鉄鍋流入以後で、内耳鉄鍋や吊耳鉄鍋と並行するものであろう。大陸方面では15世紀代に貂皮交易が盛んになり、明や朝鮮から大量の農耕具、鉄鍋などの鉄製品が東北地方へ流入する。しかし鉄製品の流入を愁いた明朝政府の封関政策〔深沢1995〕や鉄鍋の値上がり（『柳邊紀略』）によって樺太方面へ鉄鍋が入らなくなる。一方本州から順調に流入量を増加させていった鉄鍋も、15世紀中ごろから16世紀中ごろまで続いた和人とアイヌとの戦いによって、また本州戦国期の混乱によって、その流入量を減ずることになる。その結果広範囲に土鍋が製作され、流入量の少ないところでは19世紀頃までその製作が続けられたと考えられる。

北海道からは、常呂町ライトコロ川口遺跡ほか数例出土している⁽⁷⁾。

[中世Ⅴ期] [近世Ⅰ期]

食膳具—白磁碗 煮炊具—内耳土鍋・吊耳鉄鍋・片口鉄鍋

この時期の陶磁器は、釧路町遠矢第2チャシ跡から出土した白磁皿1点のみである。和人が入り込んだ可能性も否定できないが、交易によってチャシ跡に持ち込まれたと考えるのが自然であろう。

平取町ユオイチャシ跡，ポロモイチャシ跡，二風谷遺跡，イルエカシ遺跡などの遺物と同じように，威信財と考えていいのではなかろうか。

この時期のアイヌ文化の遺跡としては，遠矢第2チャシ跡，弟子屈町サンペコタンチャシ跡，釧路市ヌサマイ遺跡などがあげられよう。マサマイ遺跡の第43号墓からは，内耳鉄鍋，山刀，永楽通寶までをふくむ古銭，ガラス玉，耳飾りなどが出土している。

道央，東北部とも，この時期の墓には，多くの副葬品が見られるようになる。鉄製品の多くは本州からの，ガラス玉や耳飾りは樺太からの移入品であった。交易によって獲得した物が被葬者の威信財であり，この他銚先や中柄など地元で製作されたものと共に，生前の身分や地位を表象するものであったと考えたい。このような交易品，特に鉄鍋などの実用品が副葬されることは，代用品を所有しているか，いつでも手に入れられる状況にあったことを示しており，交易が活発であったことを意味していよう。

3 当時の食生活に関する研究

アイヌ文化の時期に人々が何を食料としていたかについて，若干ふれてみたい。

現在アイヌの食事として知られているものには次のようなものがある。サケ・マスを中心とする漁撈資源，シカなどの陸獣，アシカ・オットセイなどの海獣，木の実・地下茎・野草などの植物資源である。このほかアイヌの人々が雑穀類の農耕を行っていたことはほぼ確実である。ただどれだけ農耕作物に依存したかについては，明確な答えが出されていない。

当時の食料資源について手掛かりとなるものに，遺跡から出土した動植物遺存体の調査がある。


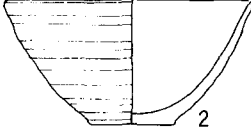
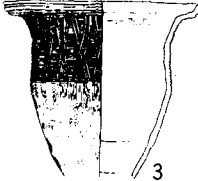

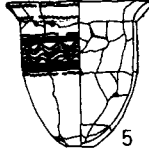
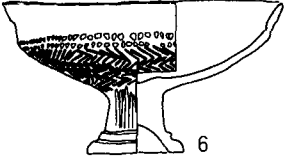

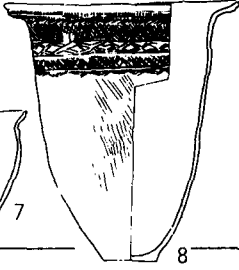
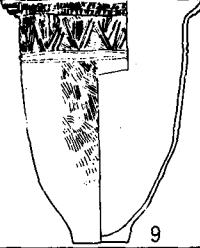
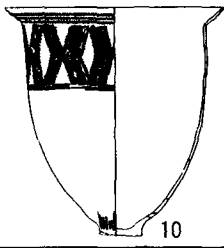
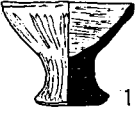



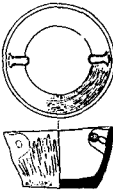

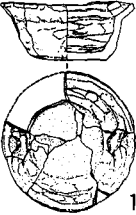
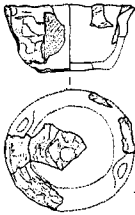

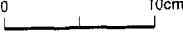
千歳市美々8遺跡低湿部〔近世I期〕では，植物種子（オニグルミ核，スモモ核），貝類（カワシンジュガイ，ウバガイ，ホタテガイ），魚類（サケ，イトウ，カレイ，ニシン，ウグイ），海棲哺乳類（クジラ），陸上哺乳類（エゾシカ，ヒグマ）が検出されている。海から10kmほど内陸に入り込んでいるにも関わらず，海と関連するものが多いのは，丸木船の出土など，河川交通の拠点にあった遺跡と考えられることと矛盾しない。

美々8遺跡の下流部にある弁天貝塚（18・19世紀）からは，植物（オニグルミ核片，スモモ核，クリ果肉，ヒシ果実，マメ科種子，ソバ属花粉），貝類（ウバガイ，エゾタマキガイ，ホタテガイ，カワシンジュガイなど35種），魚類（カレイ，ヒラメ，シシャモ，ニシン，サケ属，イトウなど），陸上哺乳類（エゾシカ，イヌなど），鳥類（アホウドリ，カモ類など）が検出されており，美々8遺跡と比べて海棲のものが多いことがわかる。海獣類が少ないのは，立地と関連するためであろうか。

東北部のオホーツク海の砂丘上に立地する小清水町フレイトイ貝塚では，主体を為す貝類（ヤマトシジミ，ウバガイなど8種）に混じって，魚類（カレイ，ウグイ，サケ類，カサゴ，メナダ，ブリ，ツノサメ類など11種），海獣類（オットセイ類，アシカ類，クジラ類），哺乳類（エゾシカ，イヌ），鳥類（ハクチョウ類，アホウドリ類，ウミガラス類）の骨が出土する。海獣類の骨が出土することが特色としてあげられよう。

釧路川上流部に位置する矢沢遺跡（サンペコタンチャシ跡）では，エゾシカ等の獣骨，魚骨，貝類が検出されている。内陸部はエゾシカが増え，海獣が減る傾向がある。

図13 北海道・東北部

	食 膳 具	煮 炊 具				
古代 後 Ⅲ	 1	 2	 3	 4	 5	
中 世 Ⅰ	 6	 7	 8	 9	 10	
Ⅱ	 11	 12	 13	 14	 15	 16
Ⅲ						
Ⅳ			 17	 18		
Ⅴ	 19					
近 世 Ⅰ	 0 10cm					

1～3 錦町, 4・5 ピラガ丘, 6～9 楠, 10 浜別海, 11～15 西月ヶ丘
16 材木町 5, 17・18 ライトコロ川口, 19 遠矢第2 シャチ跡

海岸段丘上にある釧路市フシココタンチャシ跡では、エゾシカ、アオウミガメ、貝類が見られる。以上のようにアイヌ期の食料は植物食、貝類、魚類、海獣類、哺乳類、鳥類と多岐に亘っており、縄文時代と続縄文時代の貝塚資料と比べても大きな違いはない様である。

擦文時代との変化を見ると、釧路市材木町遺跡では次のようになる〔金子浩昌1989〕。魚類は、擦文時代はサケ属、ニシン、コイ科、タラが主で、アイヌ期にはサケ属、ニシンにアイナメ、カレイ類、メカジキが加わる。メカジキはアイヌ期によくみられるものである。擦文時代には鳥獣骨がほとんどみられないのに対し、アイヌ期は鹿の骨角が多くみられた。焼土に含まれる骨には、陸獣の他に海獣（おそらくイルカ、オットセイ、アシカ）があった。魚類は大きな変化はないが、動物骨、特にシカと海獣に大きな違いが見られる。海獣は地域により大きな差があるものの、毛皮交易との関係においても注意する必要があるだろう。

南西部では、海岸部近くの瀬田内チャシ跡で貝類（アワビ、クボガイ、ヒメエゾホラ、ベンケイガイ、コタマガイなど）、魚類（ニシン、ウグイ、ホッケ、サケ、カサゴ）、海棲哺乳類（トド、オットセイ、クジラ類）、陸獣（ヒグマ、イヌ、エゾシカ）がみられる。

和人の館とされる穏内館では、貝類（エゾアワビ、クボガイ、ヒメエゾボラなど11種）魚類（ニシン、サケ類、カサゴ科）、海獣、ヒグマ、エゾシカが見られる。基本的に大きな違いは認められない。

勝山館では、コメ、オオムギ、アワ、マメ、ウリナなど栽培植物の種子が検出されており、和人社会とのつながりを感じさせる。一方アイヌ文化期の栽培植物については、沙流川流域の二風谷遺跡からモロコシ[?]、イルエカシ遺跡からアズキ、オオムギ、ピパウシ遺跡からコメ、アワ、ヒエ、キビ、アサ、アズキ、シソ属、美々川流域の美々8遺跡からアワ、ヒエが検出されている⁽⁸⁾。擦文文化期以降、コメ、アワ、ヒエ、キビなどの栽培植物種子が検出されているが、このような農耕技術がどのような経路でいつ伝わってきたのかについて、植物種子からの研究が始まっている〔吉崎1993・1995〕〔山田悟郎他1991など〕。

吉崎によれば、北海道では縄文時代前期または中期から栽培植物が現れはじめ、7世紀以降の擦文時代にはアワ、キビ、ソバなどの雑穀類がかなりの頻度で出土する。現生タイプのヒエは、11世紀頃からまとまって出土する。擦文文化期には、農耕の規模がかなり大きく生業の主体を占め、大型哺乳類の骨の出土が少なく、貝塚もほとんどないことから、日常接種していた動物蛋白質は、主に河川の魚類と簡単に捕獲できる小動物から得ていた可能性が強いとされている〔吉崎1993〕。鍬（鋤）先、鎌などの農耕具が出土していることから、本州から穀類を移入しただけでなく、栽培を行っていたことは確実であろう。

ただ、生業の中で農耕がどれだけの位置を占めていたかについては、なかなか評価が難しい。

最近注目されている、古人骨に残留する組織タンパク質（コラーゲン）の炭素・窒素の安定同位体組成からその個体の食生活を解読する「同位体による食性解析法」（南川ほか1988, p.15）がある。南川（1990・1995a・bなど）によれば、北海道の縄文人、続縄文人は海獣・大型魚類などの海産動物に依存していた生活を送っていたことがわかる。この傾向は近世アイヌ人でも同様で、80%以上のタンパク質を、海産動物に依存していた。つまり、約6,000年にわたり食生活の基本構造に大きな変化がなかったと考えられている。ところで、肉類やC3植物（ドングリ、クリ、クル

ミなど)への依存がある一方で、遺跡から検出されているヒエやアワなどの雑穀類を利用した形跡が見当たらないことが注目される。考古学の成果と比較してこの結果をどう評価するか、今後の残された課題であろう。

4 まとめと今後の課題

(1) 陶磁器の流入と受容

食器、特に陶磁器を対象にして、北海道と東北北部での変遷をたどってみた。これを図にしたのが図3～13である。これをみると空欄が多く、一目で陶磁器を使用した地域と時期がわかる。当然ではあるが、この空欄部分には別の材質の食器が収まることになる。明確になっている部分は少ないが、食膳具には木器と漆器、調理具には臼と杵または木鉢、煮炊具では鉄鍋(土鍋)、貯蔵具には蔓製品、漆器、木器が該当しよう。

では、食器に陶磁器を利用する地域と時期では、どのような差があるのだろうか。この問題について触れ、まとめに代えたい。

(2) 東北北部における陶磁器の受容

東北北部の食器の変遷をまとめると次のようになる。

食膳具は、地元で製作されていた古代の土師器から、中世Ⅱ期に舶載陶磁器と京都系のかわらけが流入する。これは一時的で、中世Ⅲ期には土師器が消え、13世紀後半から舶載陶磁器が流入するようになる。舶載陶磁器は、中世Ⅳ期からⅤ期にかけて最も量が増え国産品を凌駕するが、近世Ⅰ期にほとんどなくなる。国産陶磁器は、瀬戸美濃がⅣ期からⅤ期にかけて増加し、近世Ⅰ期には唐津、肥前を加えて需要のほとんどを占めるようになる。中世Ⅲ期からⅤ期にかけて、土師器皿が製作されないのが特徴である。

煮炊具は、中世Ⅱ期に甕がなくなり内耳鉄鍋に変わる。内耳土器が鉄鍋を補完する形で一時期みられる。吊耳鉄鍋は中世Ⅳ期頃から流入し、次第に主体になっていく。中世Ⅱ期から土製の煮炊具が見られない。

調理具は、珠洲片口鉢が中世Ⅱ期からⅣ期まで主体となっている。Ⅴ期には越前が、16世紀末から近世Ⅰ期に、瀬戸・唐津・備前・肥前播鉢が流入する。

貯蔵具は、須恵器が中世Ⅰ期でなくなる。中世Ⅱ期には一時的ではあるが常滑と渥美が入る。珠洲は同時期からⅣ期まで主体をなしている。Ⅳ期には、信楽、越前のほか、朝鮮、黄褐色釉の舶載品が加わる。

中世ではⅡ期とⅣ期が大きな画期と言えよう。Ⅱ期は、地元での食器生産をやめて東北北部の独自性が消え、日本史レベルでは東北北部が中世国家に組み込まれていった時期である。Ⅳ期は、十三湊の繁栄とともに舶載陶磁器が増加した時期である。

東北北部においては、陶磁器の出土はほとんど城館跡に限られる。東北北部の農村遺跡ははっきりしていないが、十三湊の市街地周辺からは数多くの遺物が出土している。この様な町屋や城下町などを除き、農村では陶磁器が使用されていたかどうか明らかでない。村落部においては、おそらく陶磁器文化はセットとしてでなく、すり鉢などの特殊な機種から受け入れられていくのであろう。木製(漆器)が広く利用されていたと考えられる。近世Ⅰ期になると、陶磁器の使用層が広がり始

めるのであろう。

(3) 北海道における陶磁器の受容

北海道南西部においても、主として館跡から陶磁器が出土している。片口鉢など少数の遺物が出土しているのは村落の跡と考えられる。志苔館跡、勝山館跡から出土する陶磁器は、東北北部とほぼ同じ変化を示しており、東北北部と同じ食文化が南西部の一部に入っているといつてもよいのかもしれない。道南における和人の定着を、陶磁器が示しているといつても過言ではなからう。

道央部と東北北部にあっては、片口鉢が主体で供膳具の出土を合わせても量が少なく、日常生活品の主体を占めたとは思えない。道央においても点在する陶磁器の出土地点を、和人の進出の跡ととらえたほうが良いのではなからうか。ただ、16世紀末から近世Ⅰ期にかけて、アイヌ文化の遺跡の中に陶磁器がみられるようになる。和人との接触機会が増える中で、陶磁器を受け入れることがあったようである。近世後期になると、陶磁器の浸透が進み、近世末には道内各地の遺跡から陶磁器が出土するようになる。しかしその大部分は徳利と貧乏徳利であり、酒と結びつくものである。基本的にアイヌ文化の食器組成に陶磁器は含まれておらず、日常生活品とするより威信財としての意味が強かったと考えていいのではなからうか。使い込んだ播鉢は儀礼に伴う使用と考えられることもできよう。

この様な陶磁器に対する受容の仕方は、漆器が近世アイヌ文化のなかに、儀式用具として、また生活用具として利用されていることと大きく異なっている。漆器は縄文時代から道内で製作されたものである。続縄文、擦文時代にその伝統が残っていたかどうかは明らかでないが、律令国家や津軽蝦夷との接触によって、古代から手に入れていた、なれ親しんだものであったといえよう。それに対し陶磁器は新しいものであり、その主な使用者である和人とは、交易関係は持つものの緊張関係が続く時代も長かった。それが積極的に陶磁器を受け入れた和人の館主とは異なり、「あえて陶磁器を利用しようとする文化」を形成することになったと考えておく。

食文化から「北の文化」を考えてみた。ここで指摘した特徴が、文化の別の面ではどのように表れているのであろうか。いくつかの文化要素を対比する形で、「北の文化」を考えてみる必要がある。そして、それは「中の文化」「東アジアの文化」を念頭に置いたものでなければなるまい。

本州における陶磁器研究と比べ、はなはだ概括的な内容になってしまった。陶磁器を集成するにあたり、東北北部については手に入った資料に限られ、多くの欠落がある。また実際に見ることのできなかつた資料がほとんどであり、時期の認定等に誤りが多いかと思う。筆者の深く反省する点である。研究の視点を含め、いろいろご批判とご教示を頂ければ幸いである。

本研究会を主催された吉岡康暢先生はじめ研究会のメンバーの方々、また遺物を見せていただいたりご教示を頂戴したの方々、図の作成にご協力いただいた山下かず子さんに大変お世話になりました。末筆になりましたが、厚くお礼申し上げます。

(北海道埋蔵文化財センター、国立歴史民俗博物館共同研究員)

註

(1)——たとえば、北海道・東北史研究会では1986年7月に函館シンポジウムを開催しており、その内容は同会編1988『北からの日本史』第一集としてまとめられている。また同会では1988年7月に弘前シンポジウム（同会編1990『北からの日本史』第二集）、1990年7月に上ノ国シンポジウム（同会編1993『海峡をつなぐ日本史』）、1994年7月に余市シンポジウムなどを開催している。いずれも東北、北海道、東北アジア史の視点から日本史を再構築する方向がみられる。

また、日本考古学協会では1991年11月に仙台でシンポジウム「北部日本における南北問題」を開催し、東北南部と北部の違い、北海道との関連について考えている。これも同協会編1994『北日本の考古学』として刊行されている。

(2)——砂底土器については櫻田隆がまとめている〔櫻田1993〕。北海道では、上磯町矢不來3遺跡出土例をあげている。この他、千歳市美々8遺跡から、甕が2個体出土している（北海道埋蔵文化財センター1994 P.87, 図III-19・20）。

(3)——北海道では函館市志苔館跡で検出されている〔函館市教育委員会1986〕。

(4)——多賀城碑には、北に靺鞨（隋・唐代の中国東北部から沿海州の民族名）の名が記されている。鎌倉時代には日持上人が北海道を経由して大陸を目指したといわれている。中世末から近世の文献にも、北海道北部が唐（から）へ通じているとの認識がうかがえる。

文明14年（1482）李氏朝鮮に遣使した「夷千島王」は、安藤政秀ではないかといわれている。また、大量の舶載陶磁器も直接交易によって運ばれた可能性もある。

(5)——森本岩太郎ほか1974。北海道では知内町湧元遺跡で珠洲片口鉢VI期の例がある。

(6)——擦文文化の絶対年代を示す、次の資料がある〔石附1959〕〔菊池1963〕〔前田1976〕〔越田1994〕など

1) 古銭

①別海町浜別海遺跡第1号竪穴住居床面から元豊通寶（初鑄1078年）が、宇田川編年（宇田川1980）の擦文晩期の土器と出土している（北地文化研究会1971）。銭は、方孔の部分が丸くすられている。同様の例は、オホーツク文化の遺跡であるオンコロマナイ貝塚の熙寧重寶（初鑄年1073年）やモヨロ貝塚の景祐元寶（初鑄年1034年）にみられる。いずれも垂飾として使用されたものと思われ、本州を経由することなく大陸からオホーツク文化を経由してもたらされた可能性を示すものである。

②泊村茶津4号洞窟で擦文土器内から出土した皇宋通寶（初鑄年1039年）がある。土器は口縁部が欠けており、年代がはっきりしない〔竹田1970〕。

③伊達市南有珠7遺跡のSH003貝塚上部貝層から嘉祐元寶（初鑄年1056年）が出土した。中期から後期の土器が多くみられる。

④北見市南町C遺跡の溝中から開元通寶が出土している。現在分析中であり、報告書の刊行を待ちたい〔北見市教育委員会1992〕。

2) 湖州鏡

①釧路市材木町5遺跡第15号住居跡床面から出土した。踏み返されているため明瞭でないが、「湖州真石□念二□□□」の銘がある。本州では12世紀前半から中頃に使用されたといわれる〔西1993〕。伴出する土器は晩期のものである。古銭と同様に大陸経由で入ってきたと考えられるが、本州では東北地方にも多くみられることから、藤原氏勢力の伸長と関連をもつ可能性も残されている。

3) 中世陶器

①上の国町竹内屋敷遺跡で、擦文期の竪穴住居上層から珠洲系陶器の壺破片が出土した。第I期後半で12世紀末葉から13世紀初頭とされる〔吉岡1979〕。

②神恵内村観音洞窟では、擦文土器より上層で珠洲系陶器の壺と片口鉢片が出土した。第IV期で14世紀代である〔吉岡1979〕。

(7)——北海道内出土内耳土鍋一覧（表3）参照。

(8)——吉崎昌一1995bによった。

表3 北海道内出土内耳土鍋一覧

市町村	遺跡名	種類・耳足	時期	文献
奥尻町	青苗貝塚	縦耳・2耳? 径23.4	擦文	石附喜三男 1959
		縦耳	擦文	櫻井清彦 1958
瀬棚町	利別川河口	縦耳	擦文	加藤邦夫 鋸歯文あり
七飯町	桜岡付近	縦耳	擦文?	菊池徹夫他 1963
余市町	大川遺跡	縦耳・横耳	?	(余市町教育委員会、発掘継続中)
札幌市	円山	縦耳		鳥居龍蔵 1903
札幌市	中央競馬場馬場北側	4個		羽賀憲治 1975
札幌市	北28西10から北29西12			羽賀憲治 1975
札幌市	麻布町8丁目から篠路太平			羽賀憲治 1975
札幌市	北2条西10丁目			羽賀憲治 1975
稚内市	オンコロマナイ?			大場利夫・大井晴男編 1973, 42図1
稚内市	オンコロマナイ	縦耳2点		(稚内市百年記念塔資料室蔵) 菅正敏 1969
枝幸町	岡島川尻	横耳 2耳		坪井正五郎 1888 鳥居龍蔵 1903
枝幸町	フレップ川口段丘	縦耳		菅正敏 1969
常呂町	ライトコロ川口7号竪穴埋土	横耳2耳		東京大学文学部 1980
	11号竪穴上層	横耳2耳 径16.8		東京大学文学部 1980
	11号竪穴上層	縦耳		東京大学文学部 1980
斜里町	朱田竪穴群(竪穴上層)	不明		三浦淳平・杉山雅俊 1952
根室市	西月が丘遺跡	2耳	擦文	八幡一郎 1967
不明	(トーサンポロ?)	横耳2耳 径12.4	擦文	前田 潮 1976 (鋸歯文あり、函館市立博物館蔵)

引用・参考文献

- 天野哲也 1987 「本州北部は擦文文化圏に含まれるか」『考古学と地域文化』
- 石附喜三男 1959 「奥尻島青苗貝塚出土の内耳を有する土器について」『黒曜石』9
- 飯村 均 1994 「平安時代の鉄製煮炊具」『しのぶ考古』10 p.45-54
- 宇田川 洋 1980 「擦文文化」『北海道考古学講座』
- 宇田川 洋 1980 「アイヌ考古学」教育社
- 榎森 進 1990 「十三～十六世紀の東北アジアとアイヌ民族—元・明朝とサハリン・アイヌの関係をを中心に」『北日本中世史の研究』吉川弘文館 p.223-268
- 1995 「アイヌ民族と安藤氏」『津軽安藤氏と北方世界』p.214-254
- 大瀬秀男 1988 「茶毘館遺跡出土の陶磁器について」『茶毘館遺跡』青森県教育委員会
- 大場利夫・大井春男編 1973 「オンコロマナイ貝塚」
- 大沼忠春 1989 「本州の文化」『古代史復元』9
- 小口雅史 1993 「「夫」字篋(墨)書について」『海峡をつなぐ日本史』p.231-248
- 金子浩昌 1989 「材木町5遺跡出土の動物遺体」『材木町5遺跡調査報告書』釧路市教育委員会 p.357-372
- 菊池徹夫他 1963 「北海道七飯町出土の内耳を有する土器について」『考古学雑誌』48-1
- 工藤清泰 1983 「第6章中世(鎌倉・室町時代)」『青森県の考古学』
- 工藤清泰 1994 「古代末・中世初期の北奥」『歴史評論』No.535, p.32-46
- 工藤清泰 1995 「城館生活の一段面—埋納儀礼の考察」『蝦夷の世界と北方交易』(中世の風景を読む1), p.331-368
- 久保 泰 1979 「松前町上川墳墓遺跡の調査」『松前藩と松前』13
- 越田賢一郎 1984 「北海道の鉄鍋について」『物質文化』42
- 越田賢一郎 1985 「山丹交易をめぐる国際情勢」『盈虚集』2 立教大学東洋史同学会会誌
- 越田賢一郎 1988 「北海道における中・近世考古学の現状と課題」『物質文化』50

- 越田賢一郎 1990 「北海道の近世遺跡」『考古学ジャーナル』323
- 越田賢一郎 1994 「擦文土器の終焉（上・下）」『中世土器研究』73・74
- 櫻井清彦 1958 「北海道奥尻島青苗貝塚について」『古代』27
- 櫻田 隆 1993 「『砂底』土器考」『類古論聚—久保哲三先生追悼論文集』p.353-370
- 佐々木浩一 1993 「根城・発掘調査の成果」『海峽をつなぐ日本史』p.107-140
- 佐々木達夫 1981 「日本海の陶磁交易」『日本海文化』8 p.1-36
- 佐々木達夫 1982 「遺跡出土陶磁器の研究—北日本中世城館跡を中心に—」『金沢大学文学部論集 史学科編』2 p.1-44
- 佐々木達夫 1983 「津軽・蓬田大館の発掘—1981年—」『日本海文化』10 p.17-57
- 進藤秋輝 1994 「古代城柵の設置とその意義」『北日本の考古学』p.124~148
- 菅 正敏 1994 「宗谷地方の先史文化ノート(1)」『北海道考古学』5
- 鈴木 信 1969 「北海道考古学 現状と課題 中世・近世」『北海道考古学』30
- 鈴木 信・越田賢一郎 1995 「各地の土器様相 1. 北海道」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編
- 須藤 隆・工藤哲司 1994 「東北地方弥生文化の展開と地域性」『北日本の考古学』
- 竹田輝雄ほか 1970 「茶津洞窟遺跡」
- 田原良信・柴田幸生 1985 「史跡志苔館跡の発掘調査」『日本歴史』444 p.84-91
- 千代 肇 1968 「北海道の歴史分野における考古学」『北海道考古学』4
- 坪井正五郎 1888 「石器時代の遺物遺蹟は何物の手に成りたか」『東京人類学会会誌』37
- 富樫泰時 1994 「縄文土器にみる南と北」『北日本の考古学』p.6~25
- 鳥居龍藏 1903 「千島アイヌ」
- 中野晴久 1994 「赤羽・中野「生産地における編年について」『中世常滑焼をおって』資料編」
- 中村和之 1992 「『北からの蒙古襲来』小論—元朝のサハリン侵攻をめくって」『史朋』25
- 西 幸隆 1993 「釧路から出土した湖州鏡」『考古学の世界』第1巻北海道東北
- 羽賀憲二 1975 「札幌市・琴似川流域にあった竪穴住居址群」『北海道考古学』11
- 服部実喜 1985 「中世鎌倉における陶磁器構成と時代的変遷」『貿易陶磁研究』5
- 半沢 紀 1994 「青森県における中世前期の貿易陶磁器」『北奥古代文化』15
- 平山久夫 1974 「青森県の中世陶磁について」『北奥古代文化』6
- 深沢百合子 1995 「エスノヒストリー (ethnohistory) としてのアイヌ考古学」『北海道考古学』31 p.271-290
- 福田友之 1993 「第四節 須恵器窯跡」『五所川原市史 資料編 I』
- 福田友之 1994 「縄文時代の物と人の移動」『北日本の考古学』p.26~51
- 藤沼邦彦 1991 「東北地方出土の常滑焼・渥美焼について」『知多半島の歴史と現在』3 日本福祉大学知多半島総合研究所
- 藤本 強 1984 「アイヌ考古学をめぐる諸問題」『北海道考古学』20
- 藤本 強 1988 「もう二つの日本文化」東大出版会
- 前田 潮 1976 「北海道の内耳鍋について」『和歌森太郎先生還暦記念古代・中世の社会と民俗』
- 松下 亘 1973 「北海道余市町大浜中遺跡の遺物」『北海道考古学』9
- 松下 亘 1984 「北海道出土の中国陶磁—特に大浜中遺跡の出土資料について—」『北海道の研究』2
- 松崎水穂 1991 「北海道の城館」『中世の城と考古学』
- 松崎水穂 1993 「勝山館・発掘調査十年の成果と課題」『海峽をつなぐ日本史』p.74-106
- 三浦圭介 1987 「かまど遺構について」『境関館遺跡』p.277-283
- 三浦圭介 1991 「本州の擦文文化」『考古学ジャーナル』341 p.22~28
- 三浦圭介 1994a 「考古学的にみた奥州藤原氏と津軽地方の関係」『年報・市史ひろさき』3
- 三浦圭介 1994b 「古代東北地方北部の生業にみえる地域差」『北日本の考古学』p.149~174
- 三浦淳平・杉山雅俊 1952 「北海道東北部の先史時代について」『北校』2
- 南川雅男・赤沢 威 1988 「縄文人の食料摂取」『遺伝』42-10 p.50 p.18-24
- 南川雅男 1990 「アイトープ食性解析からみる先史モンゴロイドの食生態」『モンゴロイド』6, p.24-29
- 南川雅男 1995 「炭素・窒素同位体に基づく古代人の食生態の復元」『新しい研究法は考古学に何をもたらしたか』p.168-177
- 南川雅男 1995 「骨から食物を読む」『古代に挑戦する自然科学』p.156-170
- 八重樫忠郎 1994 「奥州平泉遺跡群にみる常滑焼」『中世常滑焼をおって』資料集」
- 八幡一郎 1967 「北海道根室の先史遺跡」
- 山田悟郎・三野紀雄・椿坂恭代 1991 「佐呂間町浜佐呂間」遺跡から出土した栽培植物と炭化材」
「佐呂間町浜佐呂間」遺跡・HS-05遺跡』p.80-93
- 吉崎昌一他 1968 「函館市志海苔町の蓄銭遺構」市立函館博物館
- 吉崎昌一他 1973 「函館志海苔古銭」市立函館博物館 p.52-71
- 吉崎昌一 1993 「考古学的に見た北海道の農耕問題」『札幌大学女子短期大学部創立25周年記念論文集』p.35-52
- 吉崎昌一 1995a 「日本における栽培植物の出現」『季刊 考古学』50 p.18-24
- 吉崎昌一 1995b 「北海道遺跡出土の栽培植物」北海道北方民族博物館 博物館フォーラム「アイヌ文化の成立を考える」

(発表要旨)

- 吉岡康暢 1979 「北海道の中世陶器—中世日本海海運史の一齣—」『日本海文化』6
 吉岡康暢 1989 『日本海域の土器・陶器』
 吉岡康暢 1994 『中世須恵器の研究』
 吉岡康暢 1995 「北方流通史と大川遺跡」『1994年度大川遺跡発掘調査概報』p.54-73

引用文献 (中世 I-V 期は遺跡一覧表参照)

- 瀬棚町教育委員会 1980 「瀬田内チャシ跡遺跡発掘調査報告書」
 奥尻町教育委員会他 1979 「奥尻島青苗遺跡 図版編」
 奥尻町教育委員会 1981 「奥尻島青苗遺跡」
 上ノ国村教育委員会 1951 「上ノ国遺跡」
 上ノ国町教育委員会 1987 「上ノ国漁港遺跡」
 釧路市郷土博物館 1975 「釧路市桂恋フシココタンチャシ調査報告」
 瀬棚町教育委員会 1985 「南川2遺跡」
 伊達市教育委員会 1984 「伊達市南有珠7遺跡発掘調査報告」
 東京大学文学部 1980 「ライトコロ川口遺跡」
 函館市教育委員会 1986 「史跡志海苔館跡」
 平取町遺跡調査会 1989 「イルエカシ遺跡」
 北地文化研究会 1971 「浜別海遺跡」
 北海道埋蔵文化財センター 1992 「美沢川流域の遺跡群 XV」
 北海道埋蔵文化財センター 1994 「美沢川流域の遺跡群 XVIII」
 北海道埋蔵文化財センター 1995 「オサツ2遺跡(1)・オサツ14遺跡」
 松前町教育委員会 1985 「札前」
 松前町教育委員会 1989 「札前 II」
 松前町教育委員会 1991 「札前 III」
 松前町教育委員会 1993 「原口館」
 森町教育委員会 1985 「御幸町」
 森町教育委員会 1994 「御幸町 II」

引用文献 (内耳土鍋)

- 石附喜三男 1959 「奥尻島青苗貝塚出土の内耳を有する土器について」『黒曜石』9
 大場利夫・大井晴男編 1973 「オンコロマナイ貝塚」
 奥尻町教育委員会 1981 「奥尻町青苗遺跡」
 加藤邦夫 1981 「瀬棚町発見の火葬墓について」『北海道考古学』17
 菊池徹夫他 1963 「北海道七重町出土の内耳を有する土器について」『考古学雑誌』48-1
 桜井清彦 1958 「北海道奥尻島青苗貝塚について」『古代』27
 菅 正敏 1969 「宗谷地方の先史文化ノート」『北海道考古学』5
 坪井正五郎 1988 「石器時代の遺物遺蹟は何物の手になりたか」『東京人類学会会誌』37
 東京大学文学部 1980 「ライトコロ川口遺跡」
 鳥居龍蔵 1903 「千島アイヌ」
 羽賀憲二 1975 「札幌市・琴似川流域にあった竪穴住居址群」『北海道考古学』11
 前田 潮 1976 「北海道の内耳鍋について」『和歌森太郎先生選歴記念古代・中世の社会と民俗』
 三浦淳平・杉山雅俊 1952 「北海道東部の先史時代について」『北校』2
 八幡一郎 1967 「北海道根室の先史遺跡」